

K-608

山形県尾花沢市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

巾 遺 跡

発掘調査報告書

1983

尾花沢市教育委員会

山形県尾花沢市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

巾 遺 跡

発掘調査報告書

1983

尾花沢市教育委員会

序

本報告書は、尾花沢市教育委員会が昭和57年度に実施した、新農業改善事業・細野地区に係る、市遺跡の第1次発掘調査の成果をまとめたものであります。

現在、尾花沢市には100ヶ所以上の遺跡が発見されておりますが、市遺跡は、当市を代表する縄文時代の遺跡の1つであります。20数年前、村山農業高等学校教諭故吉田茂氏は、村山市を始め北村山郡の遺跡を訪れ、土器の収集と研究を精力的になされておりましたが、その際、市遺跡にも目をとめられ調査をなされております。また、県考古学史上で知られる、縄文時代早期の細野（烏子沢）遺跡は、市遺跡の南方に位置しているのであります。このように、細野地区は古くから考古学的な注目を浴びていたところであります。

近年、豊かな自然に恵まれ育まれてきた尾花沢市も、住みよい都市形成のため多方面にわたって開発がなされ、埋蔵文化財との係わりが密になってきております。これら諸事業との調和をはかり、今後とも当市の文化財保護普及に努力してまいりたいと考えております。

最後に、調査にあたって多大の御協力と御指導を賜りました関係各位、また地元土地所有者、発掘作業に従事された方々に対し、深く敬意を表します。

昭和58年3月

尾花沢市教育委員会
教育長 小松正四郎

例 言

1. 本報告書は、山形県尾花沢市大字細野字巾・カバ山に所在する「⁵⁵市遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 本調査は「新農業改善事業」に伴う緊急発掘調査である。調査にあたっては昭和57年度国庫補助金の交付を受ける。
3. 調査は尾花沢市教育委員会が主体となり、次の要領で実施する。

調査担当者	大類 誠
発掘員	五十嵐和夫、五十嵐一子、五十嵐喜助、五十嵐喜代太、五十嵐サダエ、五十嵐忠一、五十嵐仲左エ門、五十嵐トキ、五十嵐マサエ、五十嵐千代子、五十嵐千代野、佐々木忠男、菅野代、水上ナツヨ
整理	有路由生子、五十嵐一子、小関千春、吉田知己、柳橋一子
調査指導	山形県教育庁文化課
事務局	柳橋泰吉、奥山龍璋、吉田幸子、菅野与一
4. 挿図縮尺は図下にそれぞれスケールで示している。本文・挿図中の記号は、遺構にS、遺構因子にEを冠し、SK—土壌・KU—埋設土器・EU—埋甕とした。
5. 遺跡の発掘調査・整理作業並びに報告書作製などの仕事には、中央公民館および市民会館の協力を得た。文責はこれを大類誠が負う。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 調査の概要	
1 遺跡の立地と環境	4
2 遺跡の層序	6
3 遺構の分布	8
4 遺物の分布	8
III 縄文時代の遺跡と遺物	
1 遺 構	
1) 土 壕	10
2) 埋設土器	13
3) 埋 壘	14
2 遺 物	
1) 土 器	19
2) 土製品	28
3) 石 器	29
4) 石製品	32
IV 総 括	40

插图目次

第1图	调查概要图	2
第2图	巾道跡位置图	5
第3图	土層断面图	7
第4图	遺構配置图	9
第5图	土城	11
第6图	土城内出土土器拓影图	12
第7图	埋設土器	13
第8图	1号埋竈跡 (EU 1)	14
第9图	2号埋竈跡 (EU 2)	15
第10图	3号埋竈跡 (EU 3)	16
第11图	8号土城	17
第12图	3号埋竈	18
第13图	土器拓影图 (1)	22
第14图	土器拓影图 (2)	23
第15图	土器拓影图 (3)	24
第16图	土器拓影图	25
第17图	土器拓影图 (5)	26
第18图	土器実測图	27
第19图	土製品	28
第20图	凹石・磨製石斧実測图	33
第21图	磨石実測图 (1)	34
第22图	磨石実測图 (2)	35
第23图	磨石実測图 (3)	36
第24图	磨石実測图 (4)	37
第25图	石製品実測图	38

図版目次

- 図版1 遺跡遠景(上)・遺構検出状況(下)
図版2 発掘風影(上)・土器出土状況(下)
図版3 土器出土状況(上)・1号埋壙跡(下)
図版4 2号埋壙跡(上)・3号埋壙跡(下)
図版5 8号土壇埋設土器
図版6 土器出土状況(上) 3号土壇(下)
図版7 2号埋壙
図版8 3号埋壙
図版9 8号埋設土器
図版10 巾遺跡出土土器(1)
図版11 巾遺跡出土土器(2)
図版12 巾遺跡出土土器(3)
図版13 巾遺跡出土土器(4)
図版14 巾遺跡出土土器(5)
図版15 巾遺跡出土石器(1) 石鏃・石錐(上)・石小刀(下)
図版16 巾遺跡出土石器(2) 搔器(上)・笥状石器(下)
図版17 巾遺跡出土石器(3) 石核(上)・磨製石斧(下)
図版18 巾遺跡出土石器(4) 磨石(上)・凹石(下)
図版19 巾遺跡出土石器(5) 石皿・磨石
図版20 巾遺跡出土石器(6) 磨石
図版21 巾遺跡出土石器(7) 磨石
図版22 巾遺跡出土石器(8) 磨石
図版23 巾遺跡出土石器(9) 磨石
図版24 巾遺跡出土石器(10) 石冠
図版25 巾遺跡出土遺物(11) 石製品 土偶・環状土製品

付 表

付表1 巾遺跡発掘調査行程表

I 調査の経過

1 調査に至る経過

市遺跡は、山形県尾花沢市大字細野字巾・カバ山に所在する。尾花沢市には数多くの遺跡があり、「山形県遺跡地図」（昭和53年・山形県教育委員会編）には100ヶ所の遺跡が明記されている。さらに、「分布調査報告書」（7）広域営農団地農道整備事業関係遺跡 北村山地区（昭和54年・山形県教育委員会）によれば、新たに4ヶ所の遺跡が発見され、現在総数104ヶ所の遺跡が知られている。

本遺跡は、かつて研究者によって調査が行なわれたこともあって、地元の人たちには古くから知られていたようである。遺跡から出土した縄文時代中期の完形土器・破片・土偶、磨製石斧、石皿、石鎌などの石器を、多くの人たちが大切に保管している。

今回の発掘調査は、本遺跡の所在する細野地区が市の新農業改善事業としてほ場整備にかかることになり、調査の手が入れられる運びとなる。

昭和56年の秋、山形県教育庁文化課が主体となって分布および試掘調査が行なわれたが市遺跡の面積が広大なことなどから、山形県教育庁文化課、尾花沢市教育委員会、同市農林課との間で協議が行なわれ、昭和57年度以降2回に分けて発掘調査を実施することが話あわれる。今回はその第1次発掘調査で、尾花沢市教育委員会が主体となって、昭和57年10月28日から、同年11月24日までに緊急発掘調査を実施したものである。

2 調査の方法と経過

調査は秋ともあって、稲刈りが終わるのを待って行なわれる。調査対象区にグリットを組む前に、任意に1m×1m程度の小グリットを敷き、南から北へと調査を行なう。

その結果、北の水田には遺物が含まれるものの僅かで磨滅したものが多くみられる。それらの水田を除いて、遺跡全体を10m×10mの大グリットで覆い、東西軸をX軸、南北軸をY軸とする。さらに大グリットを小さな2m×2mの小グリットに分割し、調査の記録・遺物の取り上げなどはすべてこの小グリット単位で行なっている。

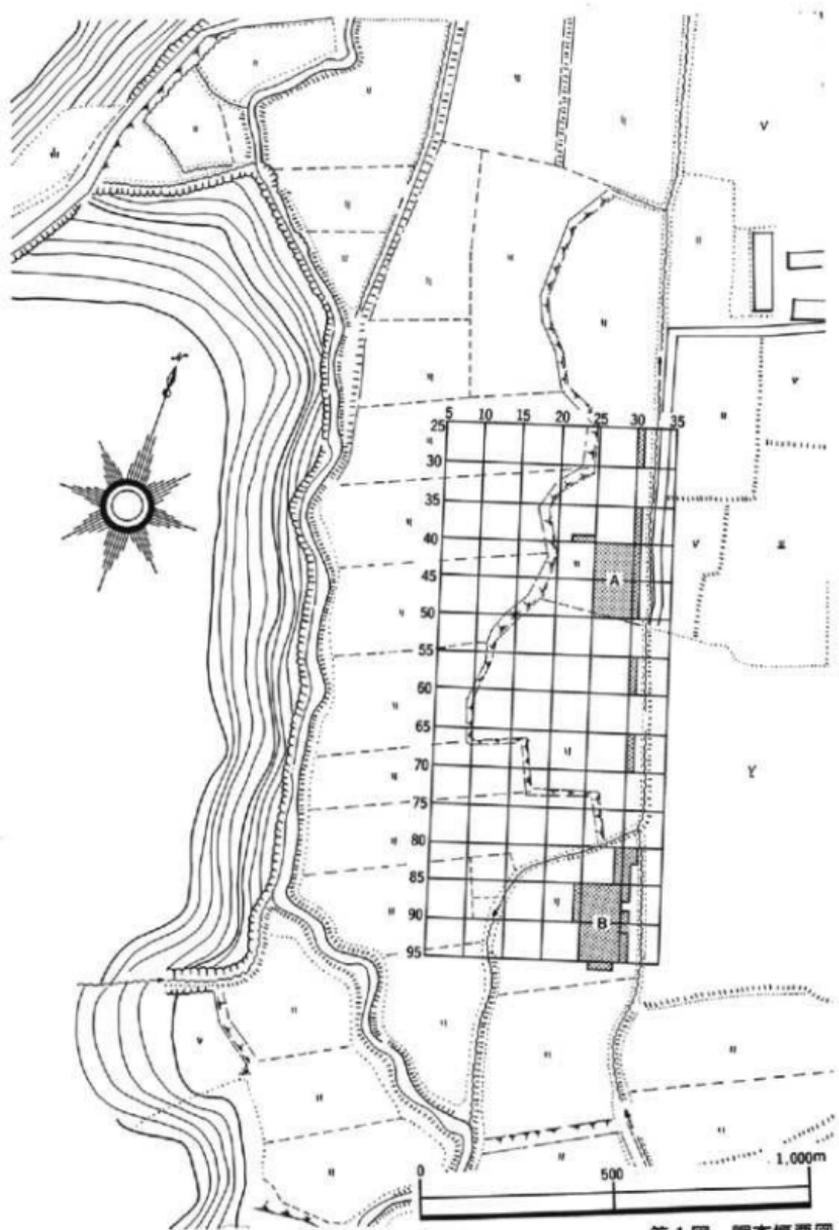
なお、グリットの名称は小グリット単位で、X軸、Y軸の交差する西北隅をそのグリットの名称とする。

遺跡の北側をA区、南側をB区とする。A区は遺物が散見できる程度で遺構は確認されず、B区において割とまとまった遺構・遺物を確認する。精査区はこのB区にしぼり、300㎡程度の面積を調査する。

以下、調査の経過について付表1として、まとめたので参照していただきたい。

付表1 巾遺跡発掘調査行程表

年月日 調査内容		昭和57年			
		10月 28日～3日	11月 5日～10日	12月 12日～20日	22日～24日
準備	資材準備	—			
	調査区設定	—			
粗掘り	手掘り	—	—	—	
	重機使用		—		
面整理	面整理		—	—	
	遺構検出			—	
遺構	土 城		—	—	
	土城埋設土器			—	—
	埋 壘			—	—
実測	遺構平面実測				
	土層断面			—	
	遺物微細図				—
	レベル記入				—
写真	全体写真				—
	細部写真			—	—
整理	遺物洗浄		—	—	—
	注 記			—	
備考				現地説明会	



第1図 調査概要図

II 調査の概要

1 遺跡の立地と環境 (第2図)

巾遺跡は、山形県尾花沢市大字細野字巾・カバ山に所在し、尾花沢市の南部に位置し、市街地中心部から約8.5kmほど行ったところにある。

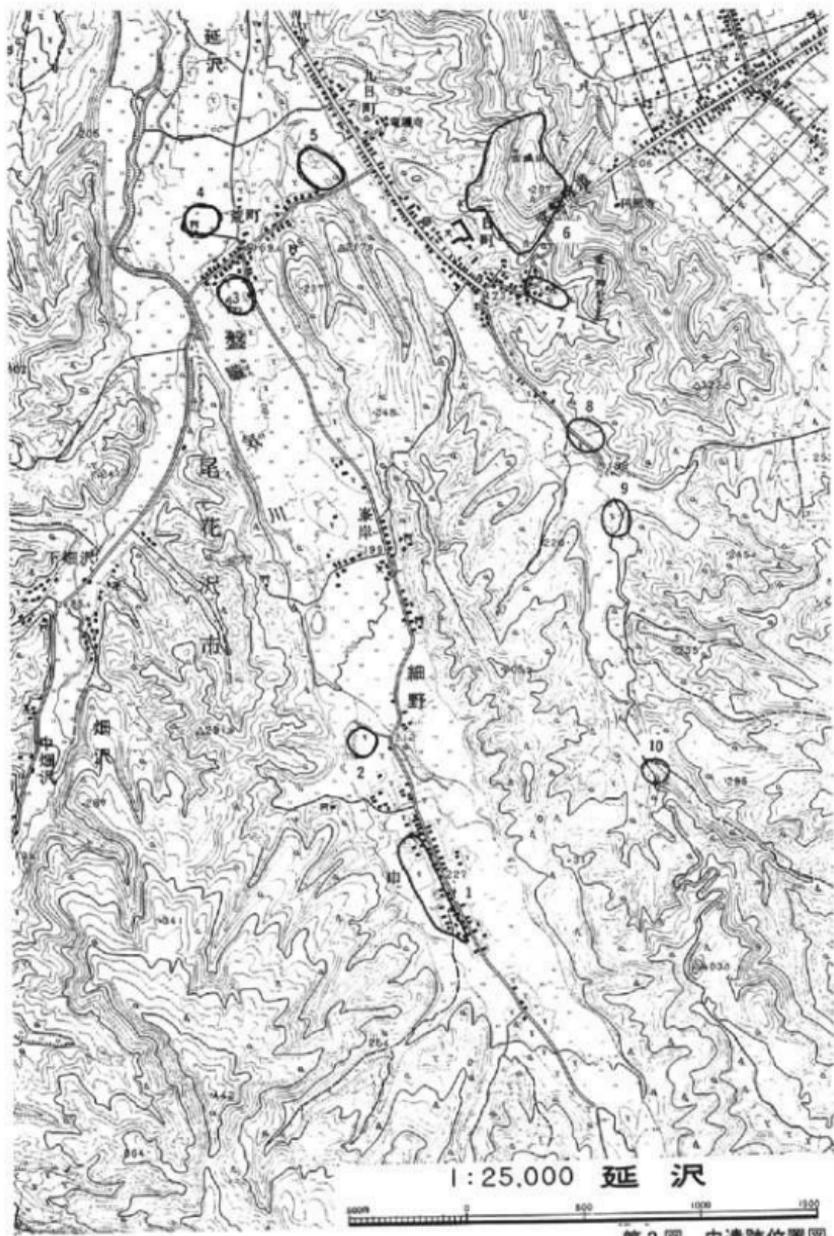
尾花沢盆地は、奥羽山脈から派生する山々が手足のように伸び、いりくみ、ふところの深い盆地になっている。規模様々な河川も放射状に走り、変化に富んだ地形を呈する。

巾遺跡もそんななかにあり、北流する腫気川の上流に占地する。腫気川によって形成された河岸段丘上にあり、南北約500m、東西約100mという大規模な遺跡である。遺跡はおおむね南から北へ傾斜するが、標高は北端で約223m、南端で231mを測り緩やかな勾配をもつ。

遺跡の中心は現在畑地や宅地となっている部分にあると考えられ、今でも土器片や石器を採集することができる。

周辺には10ヶ所ほどの遺跡が確認されているが、縄文時代のものが多いようである。県内で学史上、縄文時代早期の遺物を出土する遺跡として知られる細野(鳥子沢)遺跡は、巾遺跡の奥、腫気川をもっとさかのぼった上流に立地する。また最近、巾遺跡からほど近いところから弥生時代の土器が発見されているようである。

番号	所在地	種別	時代	
1	巾遺跡	尾花沢市大字細野字巾・カバ山	集落跡	縄文時代前・中期
2	河原遺跡	尾花沢市大字細野字河原	集落跡	縄文時代
3	荒町遺跡	尾花沢市大字延沢荒町	集落跡	縄文時代
4	大明神遺跡	尾花沢市大字延沢荒町字大明神	集落跡	縄文時代
5	向山遺跡	尾花沢市大字延沢九日町字向山	集落跡	縄文時代前・中期
6	野辺沢城跡	尾花沢市大字延沢	城館跡	鎌倉・室町時代
7	坊の入遺跡	尾花沢市大字延沢字坊ノ入	集落跡	縄文時代中期
8	カマツ板遺跡	尾花沢市大字延沢カマツ板	集落跡	縄文時代
9	田ノ沢遺跡	尾花沢市大字延沢	集落跡	縄文時代中期
10	宮田原遺跡	尾花沢市大字鶴子	集落跡	縄文時代



第2図 巾遺跡位置図

2 遺跡の層序

遺跡全体が河岸段丘上に立地し、おおむね緩やかに南側から北側へ傾斜している。今回はその西側縁辺部水田地帯が調査対象になったこともあって、地形の変化が著しい。そのなかでも基本的な層序を示してくれると思われるB区の層序をもって代表したい。

第Ⅰ層（茶褐色土） 耕作土で下部に磨滅した小さな土器片を少量含む。厚さ10～15cmである。

第Ⅱ層（濁茶褐色土） 大小様々な多量の礫を含む。礫に混在し磨滅した土器や石器がみられる。この層上部10cmぐらいの厚さで固く締りが強くなっている。また酸化鉄が礫や遺物に付着する例が多くみられる。厚さ10cmである。

第Ⅲ層（黒褐色土） Ⅱ層と同様、礫を多く含む。砂質性に富むものの粘性があり、締りもある。また細かい炭化物を含む。遺物を包含する。厚さ5cmほどである。

第Ⅳ層（暗黄褐色粘質土） 砂質性で締りが弱く、水分を含むとベトベトする。炭化物を含み、礫とともに遺物を少量包含する。

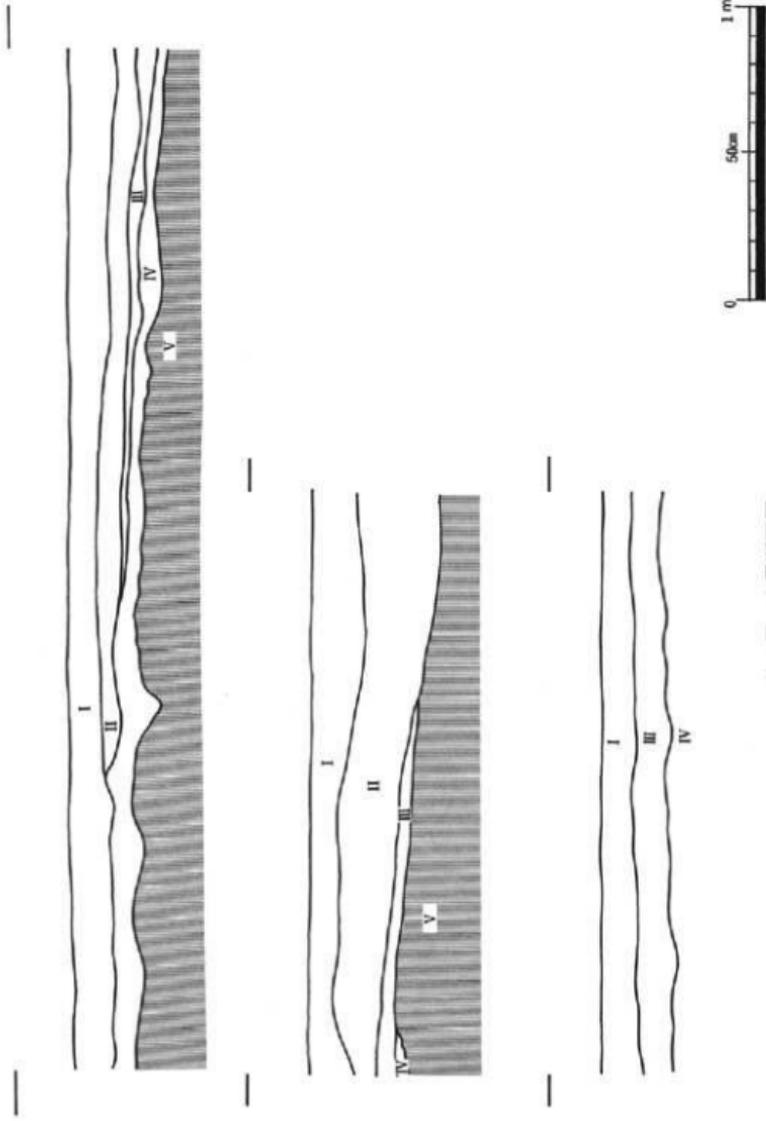
第Ⅴ層（黄褐色粘質土） Ⅳ層に比べて砂質性に富むが、締りがある。遺構はこの層を掘り込むものが多く、無遺物層である。

遺物包含層は第Ⅲ層と第Ⅳ層と考えられる。第Ⅱ層は埋土でB区西側端に行くと1mほどの堆積がみられ、調査区ではⅡ層上面に礫群が密集し水田の床土となっているようである。

主な層を平面でとらえると次のようになる。第Ⅱ層・Ⅲ層は遺構面全体を覆うが、東側はうすくなっている。第Ⅲ層は10号土壌あたりから北側に安定した堆積を示すが、西側にいくにつれて薄くなり、やがて消えてしまうようである。第Ⅳ層は11号土壌の南側に安定した堆積がみられるようである。

調査した区域のなかでA区にも、B区で確認された第Ⅲ層（黒褐色土）に相当する層を観察できたが、遺物は少量含まれるだけで、色調も黒味が強く汚れない堆積を示す。

A区とB区との間では、地山まで削りとられ、全体にわたって二次堆積の土で覆われている。



第3圖 土層断面図

3 遺構の分布 (第4図)

発掘にはいる前の聞き込み調査や、調査に見学に来られた方たちの話によれば、以前、水田をつくるために重機を使用して、土砂を方々に動かしていることを聞かされたが、調査が進むにつれて、その状況が次第に明らかになる。

削平が最も著しいところは、A区とB区との間にある水田で、東側の桑畑と同じぐらいの高さがあるといわれ、今では1mほど低くなっている。このため遺構の検出は困難であった。

A区は東側の畑地とほぼ同じ標高であるが、北側は埋め立てによるもので、最下層に河床礫がみられた。やはり遺構は確認できなかった。

今回の調査で検出された遺構はB区からだけである。その内訳は土壌3基、土壌埋設土器1基、埋甕6基である。ほかに礫群の存在が知られるが人為的なものとして認識できるまでにはいたっていない。

B区で検出された遺構の分布をみると、南北に帯状の分布を示し、これらの遺構の東側と西側には全く検出することはできなかった。遺構は東から西へ緩やかに傾斜する斜面に構築されている。

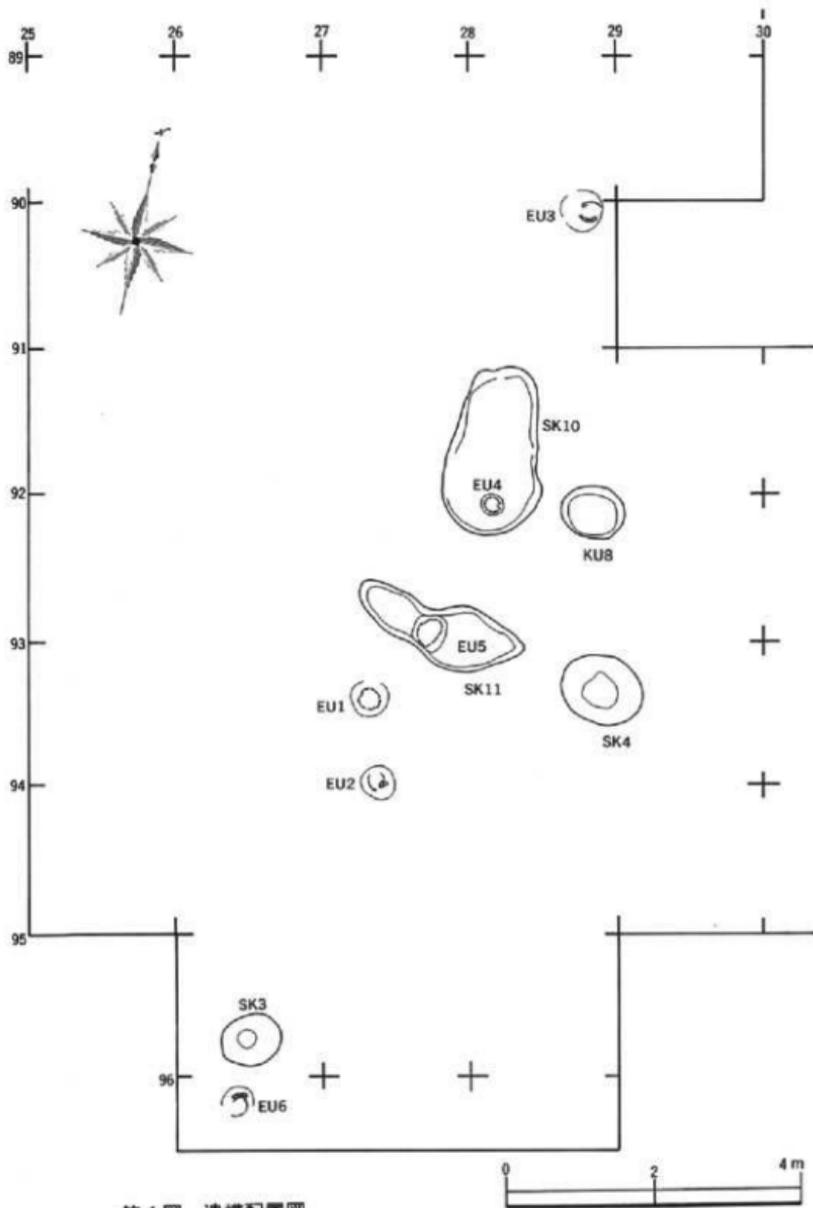
礫群も同じような分布状況を示すが、3号土壌・2号埋甕跡・4号土壌の間に広がる空間に最も多く分布し、また3号埋甕跡周辺にも密集するようである。

4 遺物の分布

多くの遺物も遺構の分布に沿った分布状況を示す。埋甕や土壌埋設土器のように遺構と共伴する土器以外は、まとめて出土する例は少ない。図版2下段で示したような状況で出土する例がしばしばみられる程度で、大半は半分以上を失うものが多い。

これらの中期土器は、まともながらも細片になっているものがほとんどで、復元には手を焼かせるものが多い。また、少量の前期の土器片が出土しているが、いずれも磨滅が著しく、これといった分布状況を示さない。

石器類の分布も、やはり、土器と同じような状態で特徴ある傾向はみられない。各種の打製石器は、土器や礫群に混在するような状態で出土する。磨石は特に礫群のなかにしばしばみられ、4号土壌の南側に広がる空間に多く分布している。



第4図 遺構配置図

III 縄文時代の遺構と遺構と遺物

1 遺構

1) 土 壌 (第5図)

3号土壌 (SK3) 26-95グリット (以後Gの略語で統一する) 第IV層中で検出する。平面プランは長径86cm, 短径76cmを測り円形を呈する。断面をみると上方が拡がり, 深さ34cmのところにくびれをもち, その下方がフラスコ状を呈した土壌である。底面は浅い摺鉢状を呈する。

覆土は暗褐色のネバネバした粘性のある土で, 割とまとまった中期の土器片 (第6図1~6) が出土する。1・4・6は同一個体で大形の深鉢形土器である。2は口縁部で粘土紐を貼りつけたキャリパー形を呈した深鉢形土器と考えられる。3は浅鉢形土器である。いずれも, 中期中葉の土器である。これらの土器は, 礫におし潰されたような状態で出土する。(図版6)

4号土壌 (SK4) 28-29-93G第IV層中で検出する。平面プランは長径116cm, 短径96cmを測り楕円形を呈する。テラスのような段がついており, 深さ36cmを測る。底面は平坦である。覆土からは中期中葉の土器が出土する。

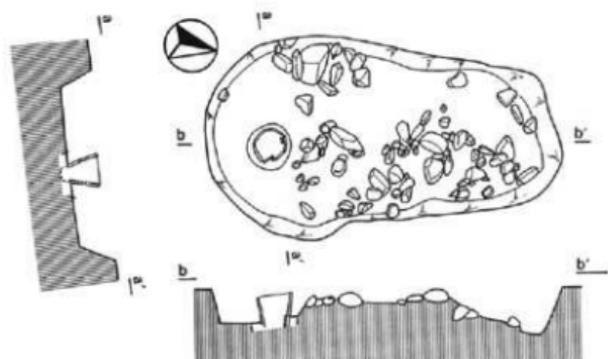
10土壌 (SK10) 27-28-91-92G第IV層中で検出する。長径422cm, 短径120cmを測り長楕円形を呈する。覆土は黒褐色土で割と粘性に富みネバネバする。

土壌内からは大小様々な円礫が出土し, 配石などのように秩序だった様相はみられない。また, 焼けていたり, 凹石, 磨石などの石器も含まれていないようである。

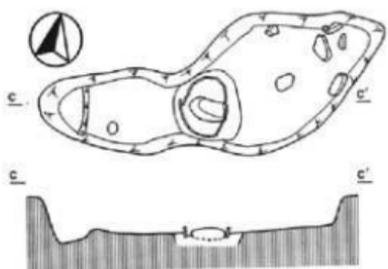
僅かに土器が出土するが地文に縄文が施されたものばかりである。土壌の南側に口縁部を欠く深鉢形土器を検出する。地文に縄文が施され文様はみられないが, 中期中葉の土器と考えられる。

11号土壌 (SK11) 27-28-92-93G第IV層中で検出する。形状がひょうたんのような形を呈し, 東側の底面に数個の礫が配される。西側端に落ち込みがみられ, くびれ部に粗製深鉢土器を検出している。土器は胴下半部が残っているだけで, 内部に平坦な礫を伴っている。

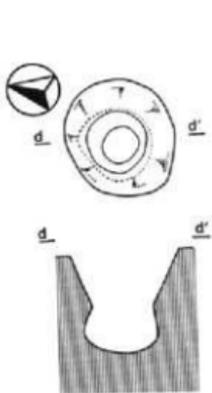
10号・11号土壌内で検出された一括した土器は, いずれも掘り込みがみられる。また, 土壌プラン確認の際, わずかに土色の変化がみられたものの掘り込みの確認まではいかなかった。ここでは埋壔としての可能性があることだけを指摘しておきたい。



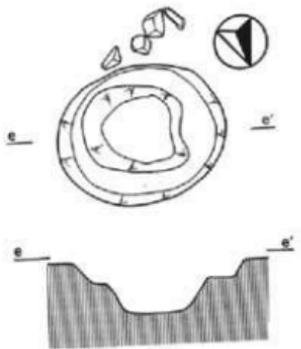
▲SK10



▲SK11



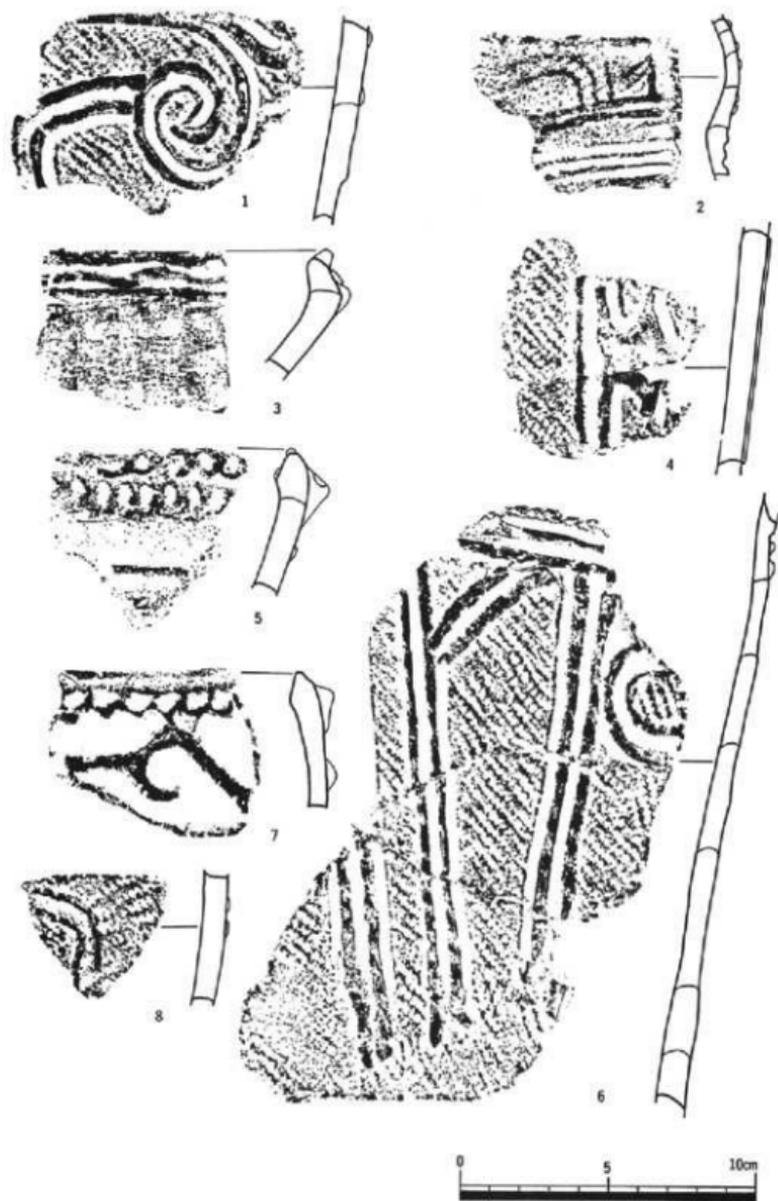
▲SK3



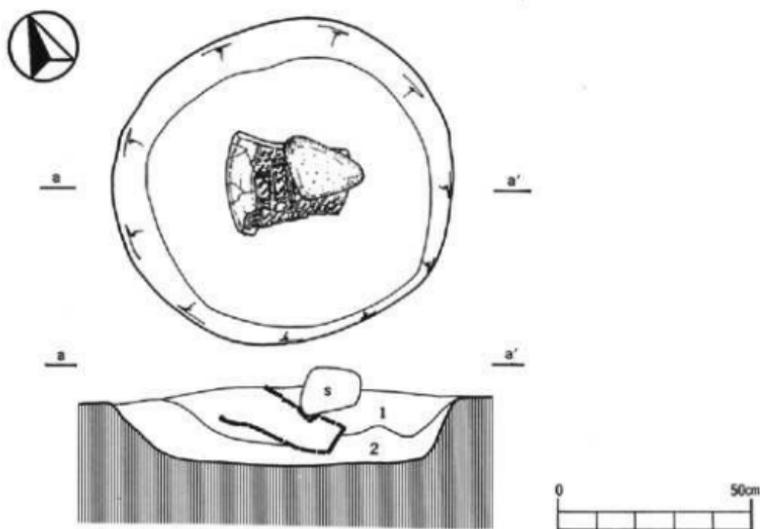
▲SK4



第5図 土 壙



第6圖 土壙内出土土器



第7図 埋設土器

2) 埋設土器

8号土坑埋設土器 (第7図)

形状 28-91~92Gの第IV層上面で検出する。直径87cm前後の円形を呈し、深さ20cmを測る。壁面は南側が垂直気味に立上がり、北側は緩やかになっている。底面は平坦である。ほぼ中央から円礫と伴に横倒しになっている完形土器が出土する。

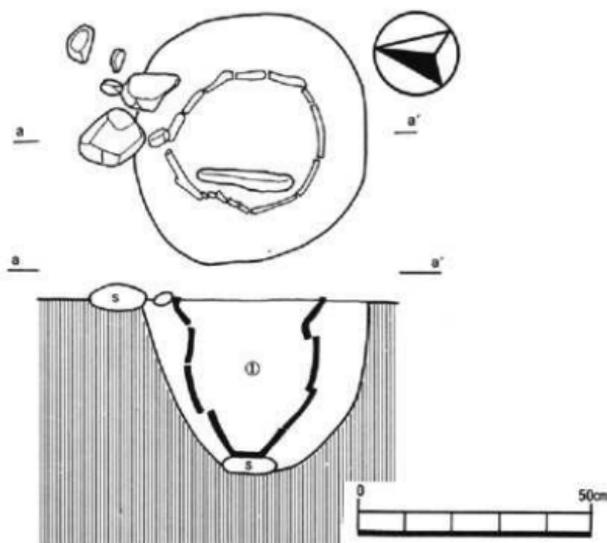
寸法 長径88cm×短径86cm

覆土 1層 (茶褐色砂質土) 細かい炭化物を多く含む砂質性の富んだ土で、締りが乏しい。

2層 (暗黄褐色砂質土) 炭化物を少量含み、砂質性に富むが締りがある。

出土遺物 土坑内から出土した遺物は、円礫と横倒しになっている土器1個体だけで、これ以外は出土していない。底面より3cmほど浮いた状態で出土する。

口縁部がゆるく外反する深鉢形土器で器高26.2cm、口径23.2cm、底径15cmを測る。口縁部文様帯と胴部文様帯が2本の沈線で区画されている。口縁部文様帯は口唇部に波状の粘土紐をめぐらせ、真下の頸部には単節の圧痕を施している。胴部文様帯は沈線文による渦巻を主体にして横位に転回する。地文は、単節縄文である。胎土に砂粒を多く含むが、焼



第8図 1号埋甕跡 (EUI)

成は良好である。色調は灰褐色を呈する。中期中葉の土器と考えられる。

3) 埋 甕

埋甕は全部で6基であるが、そのうち3基を紹介する。

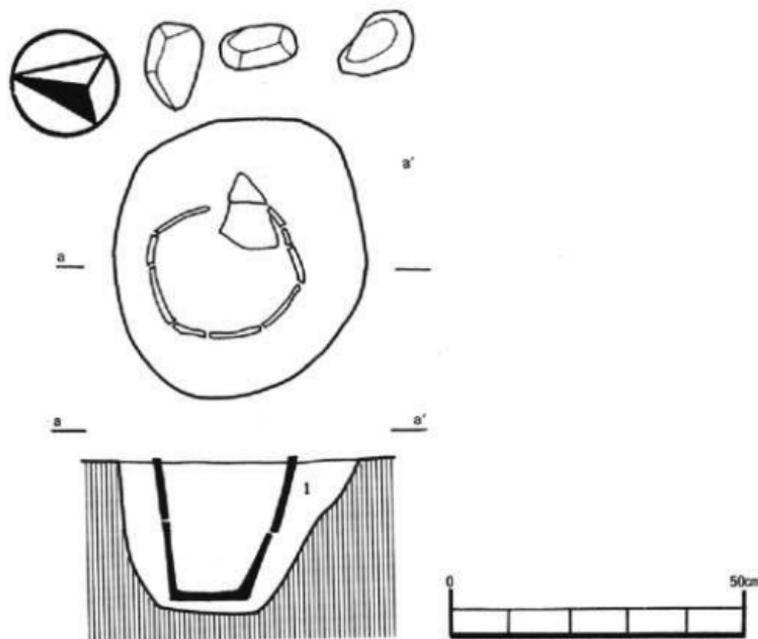
1号埋甕跡 (EUI) (第8図・図版3)

27-93Gで検出し、11号土壌に近接する。確認面は第IV層上面で、掘り込みは、ほぼ円形で径50cmを計る。掘り込みの断面をみると掘鉢状を呈し、底面に長楕円形の礫を置きその上に正位に土器を埋設している。

土器の内部に長さ20cmほどの礫を伴っている。土器内部の土と埋土はほとんど同じような層相で、茶褐色砂質土である。細かい炭火物を含み粘性がありべとべとする。

埋設された土器は完形土器であるが、遺存状態が非常に悪く、ことごとく細片になっている。口縁部が内弯気味で頸部がすぼまる深鉢形土器である。胴部上半にふくらみもち底部が割合小さく10cmほどである。

口唇内面が肥厚し、口唇上面には4個の「S」字状隆線文が貼り付けられている。さらに「S」字の突起下に垂下する隆起線文が頸部のくびれ部まで配されている。それ以外はすべて、単節の地文でうめられている。



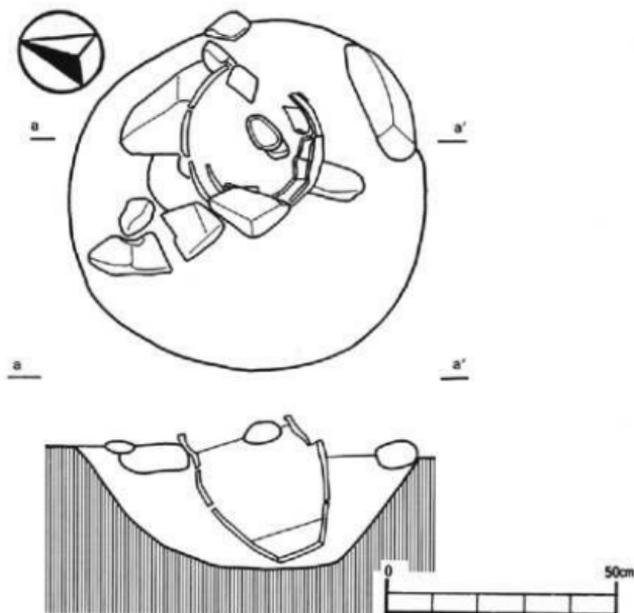
第9図 2号埋壙跡 (E U 2)

2号埋壙跡 (E U 2) (第9図・図版4)

27-93~94Gで検出し、1号埋壙跡の南側に近接する。確認面は第IV層上面で、掘り込みはほぼ円形を呈し、径40cmを計る。やや斜めに埋設されており、口縁の大半を失う土器である。

土器内部に小さな2個の円礫を伴い、土質は埋土と同じような層相を示す。茶褐色砂質土で細かい炭化物を含み、粘性がありべとべとする。

器高40cm、堆定口径32.6cm、底径10cmを計る。口縁部が内弯気味で頸部がすばまる深鉢形土器である。口唇部直下と頸部付近で2本の隆起線文が貼りつけられ、その間は平行沈線文によって調整されている。区画された口縁部には2本の隆起線文が波状に貼りつけられている。頸部には3本の平行沈線文をめぐらせ口縁部文様帯と胴部文様帯を区画している。胴部文様帯は3本の沈線文を主体にして、「の」字状、渦巻状の文様を組合せて構成している。口縁部文様帯は横位に転回するが、胴部文様帯においては縦位に転回をみせ、3単位の文様構成になっている。胎土に石英砂などを多量に含むが焼成は良好である。



第10図 3号埋壺跡 (E U 3)

3号埋壺跡 (E U 31) (第10図・図版4)

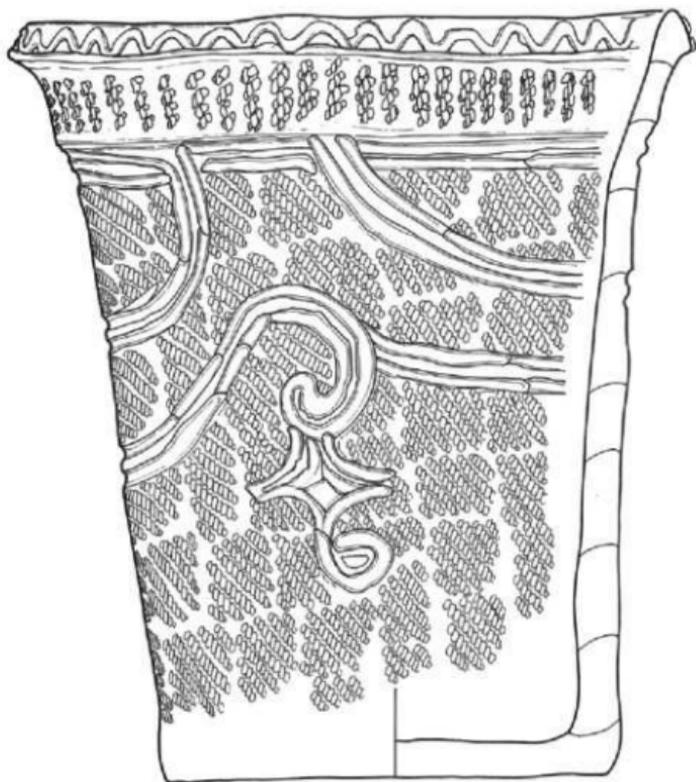
28-89-90Gで検出される。確認面は第IV層上面で、掘り込みはほぼ円形を呈し、径78 cmを計る。土器はやや斜めに埋設されており、周辺は礫によって囲まれている。土器の内部に2個の円礫と浅鉢形土器の破片を伴なう。覆土は2層に分けられ、茶褐色粘質土が胴部下半までみられ、それ以下は炭化物を多く含んだ黒褐色粘質土が堆積している。

埋土は、暗黄褐色土で砂質性に富んでいる。

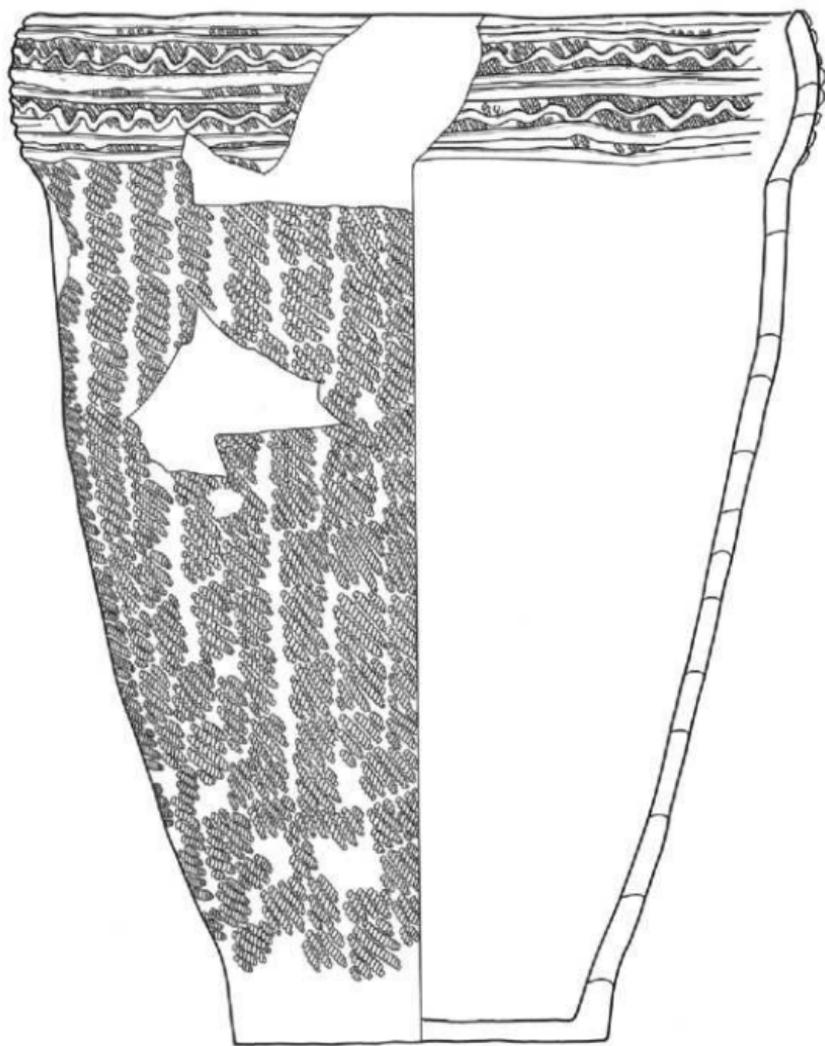
第12図に示したものが3号埋壺である。口径26cm、底径12.6cmを計る。口縁部が内弯し、頸部がいくぶんすぼまり、胴部がふくらむ深鉢形土器である。底辺部が外反気味である。

文様帯は口縁部文様帯だけがみられ、胴部以下はLR単節縄文が施されている。口縁部も地文に胴部と同じLR単節縄文を施し、2本の1組の粘土紐を口唇直下、口縁部中位、同下位に横位にめぐらせている。その区画されたなかに粘土紐を波状に貼付けている。これらの粘土紐貼付文は、そのまま調整が加えられていない。

色調は全体的に黒味を帯びており、胴下半が黄褐色を呈する。胎土に砂粒を含むものの焼成は良好である。



第11图 8号土境



第12图 3号埋甕



2 遺物

1) 土器

出土した土器は、整理箱にして約30箱分を数える。埋設土器、埋甕以外は、大半が破片であり、分類にあたっては、表出された技法および文様別に類別化している。第I群から第VII群に大別して説明してゆく。

第I群土器 (第13図1~7・10)

いずれも胎土に植物繊維を含んだ土器を本群とする。磨滅が著しく、破片のため全体の形態を知ることができない。

1類 (1~3・5・6) 結束のない羽状縄文や斜縄文が施されるものを本類とする。1は口縁部破片で羽状縄文は重複して菱形文をなす。胎土に多量の石英砂と植物繊維を含む。

2類 (3) 結束のある羽状縄文で1片だけ出土する。

3類 (4) 組紐回転文の施文された土器で1片出土する。胎土に石英砂を多く含み、キラキラし、焼成は良好。

4類 (7) 網目状燃糸文の施文された土器で1片出土する。裏面の整形は丁寧に行なわれている。

5類 (10) 底部破片であるが、底部に角押の連続刺突文が同心円状に施文されている。

第II群土器 (第13図8・9)

1類 (8) 波状口縁をなす深鉢形土器の破片と考えられるもので、1片出土する。口縁部は二重口縁になり、その上に太い沈線が刻まれる。波状頂部には円形の貼付文がみられる。

2類 (9) 口縁部が小波状で、粘土紐と横位に鋸歯状に貼りつけた土器が、1片出土する。

第III群土器 (第13図11~18, 第14図19)

燃糸圧痕文を主体とし、粘土紐の貼付・刺突・沈線との組合せによって文様が構成されるものである。

a 1類 (11・13) 口縁に燃糸圧痕が幾可学的に施文される土器である。13は浅鉢形土器の破片と考えられる。口唇部と口縁部の間に粘土紐を貼付けそれに沿って燃糸圧痕が施されている。口唇部に縦位の短い燃糸圧痕を、口縁部には三条の燃糸圧痕を鋸歯状に施す。13の口唇部は沈線が刻まれ、口縁に弧状の燃糸圧痕が施文される。

a 2類 (14・17) 燃糸圧痕と波状の粘土紐貼付文で文様が構成される土器である。口唇

部に波状の粘土紐と貼付け、刻みがいれられるものがある(14)。口縁部は縦位に燃糸圧痕が連続に施文され、頸部と粘土紐によって区画される。

a 3類 (15・16・18・19) 燃糸圧痕と沈線文および粘土紐で文様が構成されるものである。口縁部がゆるく外反する深鉢形土器と考えられる。口唇部に円形刺突をもつもの(16)や棒状の刺突文をもつもの(18)があり、また、18は口唇内面に粘土紐の貼付けがみられる。口縁部にみられる燃糸圧痕は短いものが多く、その下位に沈線文がみられる。2本の沈線間に波状、弧状の連続する沈線文が施文される。

第IV群土器 (第13図12, 第14図20~25・28)

刺突文・沈線文・粘土貼付文・爪形文などが、単独、または各施文手法が組合せられたものである。

a 類 (22~24) 沈線文に特色のある土器類である。22は沈線間を短い沈線で充填され、23・24は隆起線で区画されたなかを、矢羽根状沈線で充填している。

b 1類 (12・20) 刺突文を主体とする土器である。2本の沈線間に1本の粘土紐を貼付け、上・下から交互に刺突したもので、粘土紐は鋸歯状になっている。

20は、肥厚した口唇直下に太目の棒状工具を用いた刺突文がみられる。

b 2類 (28) 口縁部がゆるく外反する小型の深鉢形土器である。口縁が無文帯となりくびれ部に粘土紐が貼付られ、さらに何ヶ所かに垂下する粘土紐が連結すると思われる。これらの粘土紐には円形の刺突文が連続的に施文されている。

c 類 (25) 口縁が小波状になっており、口唇直下に太い粘土紐を貼付け、指頭文を有する土器である。

第V群土器 (第14図27・29~35, 第15図51・52, 第16図57~62, 第17図63~65)

沈線文を主体にして文様が構成されている土器である。

a 1類 (27, 29~33・35, 59~61) 胴部文様帯に「の」字文、波状文、渦巻文、十字状文などが施されるものである。3本単位の沈線文が多いようである。

30・59は十字状文が、29は波状文が、60は「の」の字文が、61には渦巻文がそれぞれ施文されている。

a 2類 (50・51・62・63~65) 割合に小型の土器で胴部文様帯に「フ」字状の棘、「の」の字状の字形を基本的なモチーフとして多用されるものである。細い沈線で施文されるものが多いようである。

第VI群土器 (第15図36~47, 第16図48・49・52~56, 第17図70, 第12図3号埋壺)

粘土紐貼付文と沈線文で構成される土器群である。2分類が可能である。

a 1類 (37・39・40・41・45・49・56, 第12図3号埋壺) 粘土紐貼付文を主体とする

土器である。3号埋甕が良好な資料であろう。口縁が内弯し、頸部がいくぶんびれ胴にふくらみがある深鉢型土器である。口縁部にだけ粘土紐貼付文がみられ、それ以下は地文のRL単節縄文が施文されている。37や40の土器片も同種のものと考えられる。

平行する粘土紐間に波状の粘土を貼付け、1段から2段に構成される。これらの粘土紐貼付文は沈線で調整されることなく、押圧されてるだけである。37は十字状の貼付文の中にボタン状貼付文をもつものである。

a 2類 (36・42~44・46~47・55) 粘土紐貼付文を主体とし、沈線文を合わせもつ土器である。沈線は直線的な粘土紐貼付文に沿って施されるもの(36・47)、粘土紐間の狭い空間に沈線を施すもの(46・48)などがある。粘土紐はa 1類と同じような太さをもつ。

b類 (52~56) 粘土紐貼付文と沈線文をあわせもつ土器で、多くの場合、隆起線の両側に沈線文が施される。胴部文様帯に多くみられる。

第VII群土器 (第17図67~77)

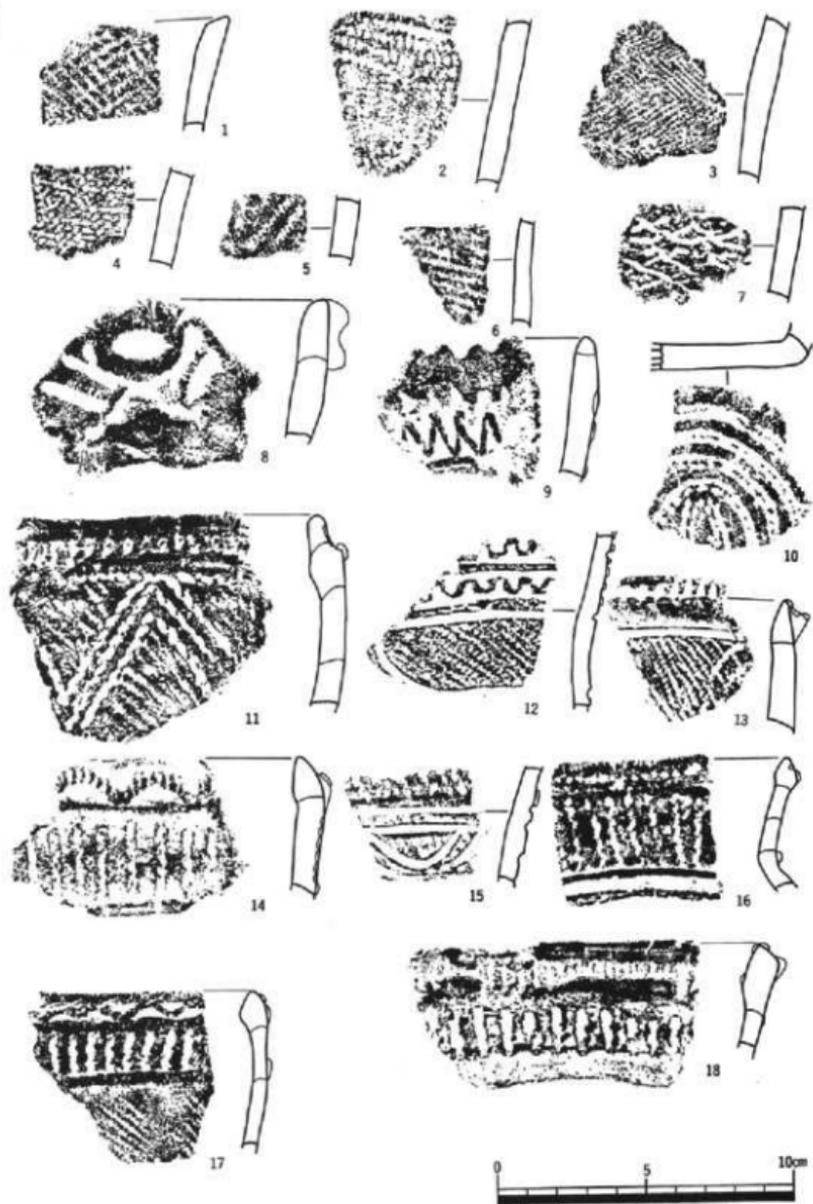
隆帯によって文様や構成されるものを本群とする。

a 1類 (73~75) 口縁部が外反し、頸部でくびれ、胴部の張る土器と考えられる。渦巻文を口唇部にもつもの(73・75)、口縁部にもつもの(74)などがあり、73・74のように口唇・口縁直下が無文帯になっているものもある。75は直下に縄文施文される。

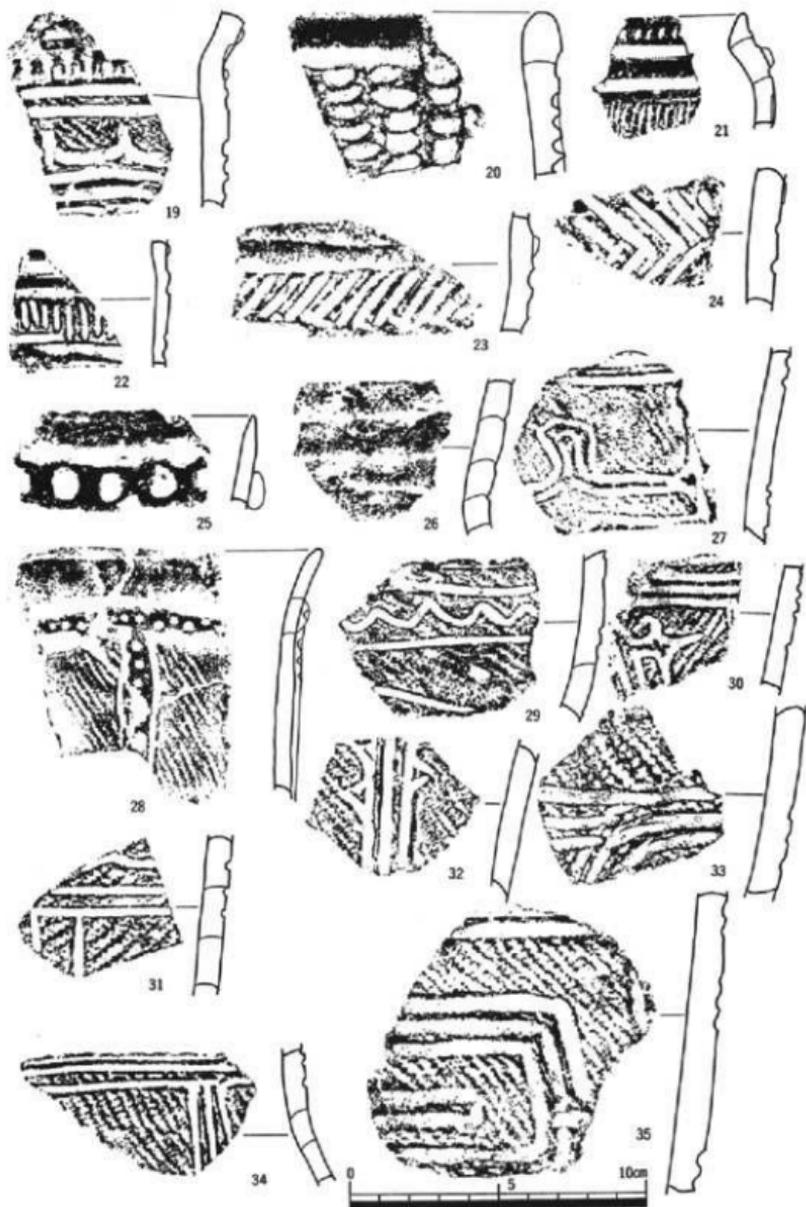
a 2類 (69・71) 口縁が内弯し、胴部が円筒状もしくはふくらむ形状をもつ土器である。a 1類に比べて小ぶりの渦巻隆帯文が口縁がめぐり、時には突起状に発達するものもある(69)。全体的に薄手の土器である。

b 1類 (67・68・69) a 2類と同じような口縁形態を呈するが、隆帯が大ぶりである。具体的な文様構成は、出土点数が少なく不明なところが多いが、72のように隆帯のなかに円文がみられものがある。

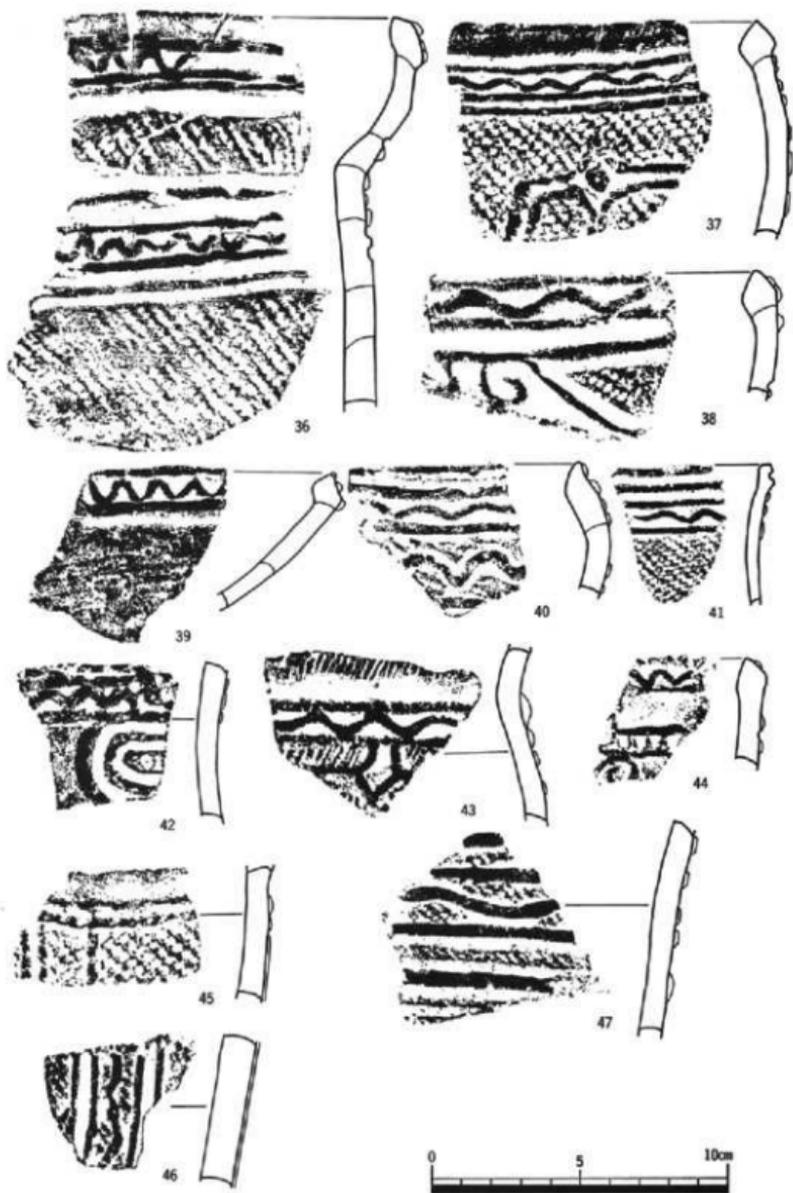
b 2類 (70・76・77) 隆帯の断面が三角形を呈するもので、丁寧な調整が行なわれるものである。3片とも胴部片と考えられるが、隆帯によって楕円形・円形に区画されたなかに充填縄文が施文される、隆帯の渦巻も大ぶりのものが多い(70・77)。



第13圖 土器拓影圖(1)



第14图 土器拓影图(2)



第15图 土器拓影图(3)



第16图 土器拓影图(4)



第17图 土器拓影图(5)



第18图 土器实测图

2) 土製品

土 偶 (第19図1)

27-86G第II層から出土する。顔面部が良好に残り、後頭部および頸部以下を失う。中空で欠損部を観察すると土偶の製作をうかがい知ることができる。

耳と口が貫通しており、頭頂部あたりに渦巻の文様がみられる。胎土に小砂を多く含むが丁ねいなつくりである。

環状土製品 (第19図2)

29-91~92G第I層から出土する。約半分を欠い、胎土に割と大きい砂粒を含むが丁ねいなつくりで黒褐色をしている。



第19図 土製品

3) 石器

今回の調査で出土した石器類は整理箱にして12箱分である。その内訳は石鏃7点、石小刀12点、石錐9点、篋状石器22点、搔・削器35点、不定形石器17点、二次加工のある石器12点、磨製石斧20点、磨石53点、凹石47点、削・剥片341点、石弯10点、砥石1点、石冠2点、その他の石製器3点で総数605点である。以下、略述してゆく。

石鏃 (図版15の1~7)

全部で8点出土する。すべて二等三角形を基調とした、無茎の石鏃で2分類が可能である。1つはえぐりのあるもので、6点確認する。もう一つはえぐりがなく底辺が直線的なもの(4)で1点だけ確認する。両面加工がほとんどであるが、4のように片面加工のものもある。石質は1が黒曜石で、他は頁岩製である。

石錐 (図版15の8-13)

孔をあけるのに用いる打製石器で9点出土する。

8・10・12はつまみ部分と錐の部分が明確である。錐の部分が長く、断面が四角あるいは三角である。9はつまみが顕著ではないが先端が磨滅している。13のような棒状のものや、1のように三角形を呈したもの、あるいは剥片の一部に丁ねいな加工し錐部をつくりあげるなど変化に富んだ形状がある。

石小刀 (図版15の14~21, 図版16の28)

いわゆる一端につまみ状の突起がある打製石器で鋭利な刃部をもつが12点出土する。そのうち完形品は5点である。いくつかに分類が可能である。

a類 (16~19)

刃がつまみの軸に対し平行するいわゆる縦形の石小刀の仲間である。片面加工が多く、つまみを打瘤の部分にもってくるもの(16・19・28)、逆に打瘤の反対側につまみをもってくるもの(17)がある。17のつまみは二又に分かれており、特異な石小刀である。28は、つまみのくびれの加工は顕著ではなく厚身がある。材質は頁岩製が多い。

b類 (20・21)

刃部がつまみの軸に対し直行するいわゆる横形の石小刀の仲間である。2点出土する。打瘤につまみを作出しており、材質は頁岩製である。

C類 (18・28)

縦形の石小刀に近似した形態をもつ。18・28とも横長の剥片を利用しており、内弯する刃部が特長である。つまみ部分は打瘤方向とほぼ直行する。材質は頁岩を用いている。

d類 (14・15)

a類・b類の中間的な形態をもつ石小刀である。つまみ部分が割合に大きく、全体的に

四角形を呈する。整形は非常に簡単である。材質は頁岩を用いている。

掻器 (図版16の23・24・35)

end scraper に当たる石器群である。完成品が多く欠損例は少ない。材質は頁岩製が多くみられる。

素材は縦長剥片を利用し、刃部を剥片の先端にもってくる例が多い。24は打瘤をはっきりと残しているが、23・35は背面から打撃を加え瘤を除き平坦に加工されている。刃部は、丸味をもち丁ねいな剥離痕がみられるが、周縁はブランディングが施されている。刃部に磨もう痕がみられる。材質は頁岩製が多くみられる。

削器 (図版16の25～27, 29)

side scraper に当たる石器群である。縦長剥片の側縁に刃部を作出しているものが多い。25, 27は背面に大きく自然面を残し、片側にブランディングを施している。29は側縁全体に調整が見られ、内湾気味の刃部の磨もうが著しい。材質は頁岩製が多い。

篋状石器 (図版16の22・30～34・36・37)

本遺跡から出土した打製石器の中でもっとも多く出土した石器である。石材は頁岩製が多い。いくつかに分類できそうである。

a 類 (20・30～33) 長さが6cm前後のものも多く、長さの割に巾のある仲間である。素材は横長剥片 (20・31・32) のものと、縦長剥片 (30・38) のものとがみられる。先端に刃部が作出され、22・23の刃部は「アヒルの口ばし」状を呈し、30～32は直線的である。断面が「カマボコ」状を呈するものが多い。

b 類 (34・36・37) 断面が「凸レンズ」状を呈し、厚みがあり細長のものを本類とする。両端が比較的尖頭状になっており、細かい平行剥離が施されている。側縁調査は丁ねいに施され、一見すると石槍に見える。

磨製石斧 (図版17の44～52)

全部で20点出土する。内訳は完形品が2点、刃部を失うもの10点、刃部を残し頭部を失うもの8点である。大きさまちまちでバラエティーに富む。刃部の形態はいわゆるハマグリ刃が圧倒的に多いが、46のように直線的なものもみられる。

44は刃部を失う石斧であるが、刃部欠損後、敲石にでも転用したものであろうか。破損面が丁ねいに磨き込まれている。

52は長さ7.5cmで厚さが1.3cmという薄手の磨製石斧で片刃である。材質は安山岩、砂岩などがみられる。

石核 (図版17の38～43)

全部で10点出土する。大きさがまちまちで角ばった石核が多い。材質は頁岩製である。

凹石（図版18の58～63）

全部で47点出土する。素材は円形・楕円・長楕円形の円礫がみられる。円形を呈した円礫には凹が両面に1対づつ有する例が多い。長めの円礫を用いたものには片面と両面とにみられるものがあるが、概して両面にみられる凹石が多い。

凹みも単独のもの、2つ以上の凹みが連続するものなどがみられる。材質は安山岩が多いようである。いずれも片手にもって負担にならない程度の重量感である。

石皿（図版19の64～66）

全部で14点出土する。いずれも欠損したものが多く、全体の形を知ることができたものは少ない。64・65は自然石の平坦面を利用したものと思われ、この種の石皿が多く出土する。66は縁どりのあるもので長い脚が付いている。敲打による丁ねいなつくりで表面のおうとつが著しい。

磨石（第21～第24図）

全部で52点確認するが大きく2分類できそうである。

a 1類（7・8） 円形・楕円形の磨石を一括する。平坦な両面がよく磨かれており、縁辺に及ぶものが多い。

a 2類（6） 形態的にはa 1類と同じであり、凹を有する磨石を一括する。磨石といいよりは凹石として分類すべきかもしれないが、a 1類と同様な磨面をもつので、一応磨石として扱っている。相方とも片手につかめる重量で、手頃な大きさのものである。材質は安山岩と花崗岩がみられる。

b類（第21図10～11・第22～第23図）

a類の使用面は平坦な面となっているが、b類は礫の短軸断面が三角形や四角形を呈した礫の稜線を使用しているため、細長い使用面を有するのが特徴となっている。全部で44点確認している。

なお、実測図中で示している矢印の中で、実線は使用面の範囲であり、破線はa類でみられるような層面である。

b 1類（10・13・14・16～22） 断面が三角形を呈し、その稜線を使用面としているものである。この種の磨石がいちばん多くみられる。さらに使用面の数などでいくつかに分分することができる。

10・13・19・19～26は使用面が一面だけみられるものである。13・15のように磨面をあわせもつもの、20のように凹をもつものがある。22・23・26のように使用面に沿った両側に敲打痕に似た剥離面がみとめられるものがあり、b類の磨石には少からずこのような剥離面が観察できる。また、25のように礫両端に敲打痕をもつものもみられる。

16～18は使用面が2面みられるものである。3点とも凹を有し、17は磨面をも有する。

b 2類 (12・14) 断面が四角形を呈し、その稜線を使用面にもつものである。この種のもは少ない。

b 3類 (9・11) 平坦な円礫もしくは楕円礫の側面に使用面がみられるものである。礫の形状は凹石に使用されたものと似ているものが多い。

9は磨面・凹をあわせもつものである。

これらb類にみられる使用面は、a類でみられる磨石の磨面とは、大きな相違がみられるようで、a類では表面がツルツルした磨面であるのに対して、b類では、細長い使用面が「あばた」状を呈するものがほとんどで、a類とは趣が異なる。一応、分類として磨石に置いておいたが、これから注意を要する石器と考えられる。

4) 石製品 (第25図)

石 冠 (第25図1・2)

2点出土する。1は30～85G第Ⅲ層から出土し、酸性凝灰岩製の柔かい石で、断面が楔状である。五面全体に沈刻がみられるb面の沈刻は途切れ気味で全体のモチーフは不鮮明である。d面の一部は新傷痕で不明になっている。a・c面は二重の三角形沈刻がみられる。e面は両端および中央に二重の直線的な沈刻がみられ、b・d面にまで及ぶ。

全体に細かい整形痕がみられ遺存度が良好である。

2は28～94G第Ⅲ層から出土する。凝灰岩製で1と同様断面が楔状である。風化が著しく表面が剥がれ落ちているものの、丁寧に整形されている。a面とその裏面のほぼ中央に凹石に認められるような凹を有する。1でみられるような沈刻はみられない。

3は28～85～86G第Ⅲ層から出土する。一部が欠損しているために全体の形は不明であるが長楕円形の板状を呈する製品と考えられる。

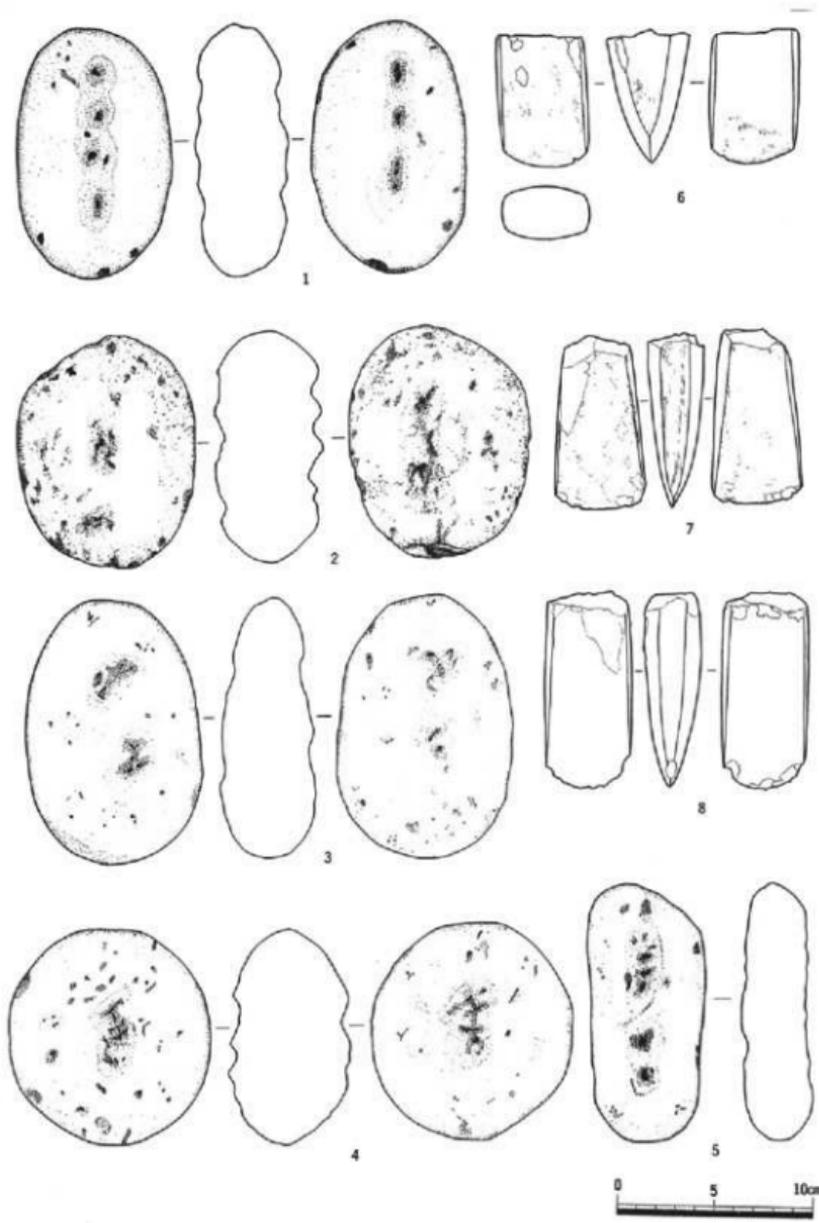
片面の端に凹がつけられ、その凹から放射状に細かい沈刻が走る。厚さ6mm前後で丁寧に整形されている。

円盤状石製品 (第25図4)

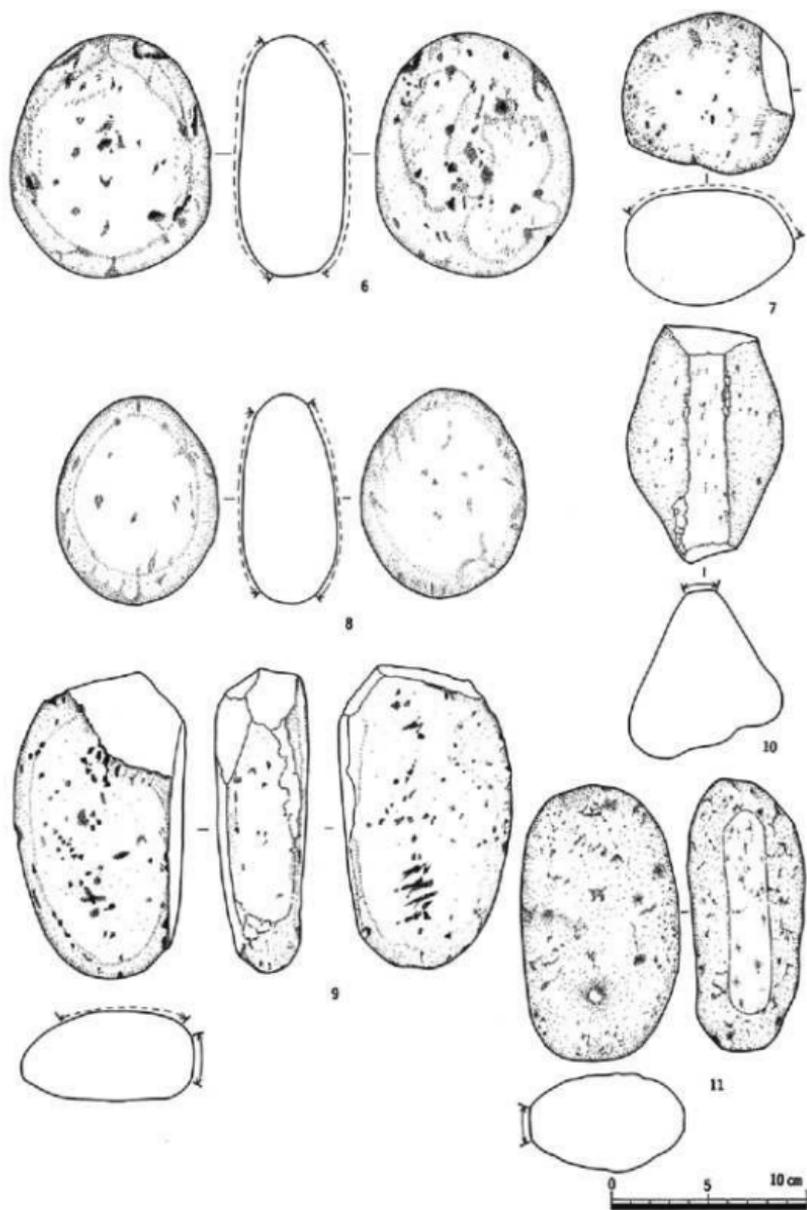
1点出土する。直径3cmほどで厚さ1cmを測る。両面が丁寧に整形され、側面にまで及ぶ。

その他の石製品

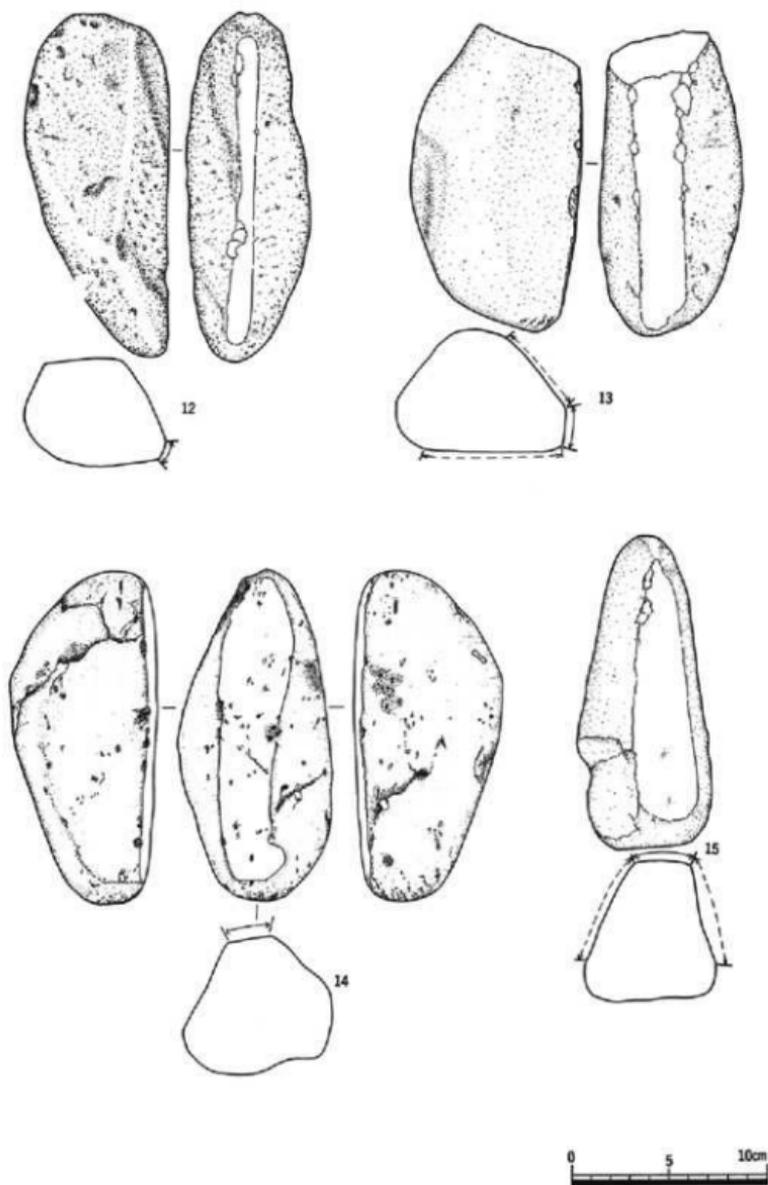
5は4号土壌内から出土したもので欠損しているので全体形が不明である。



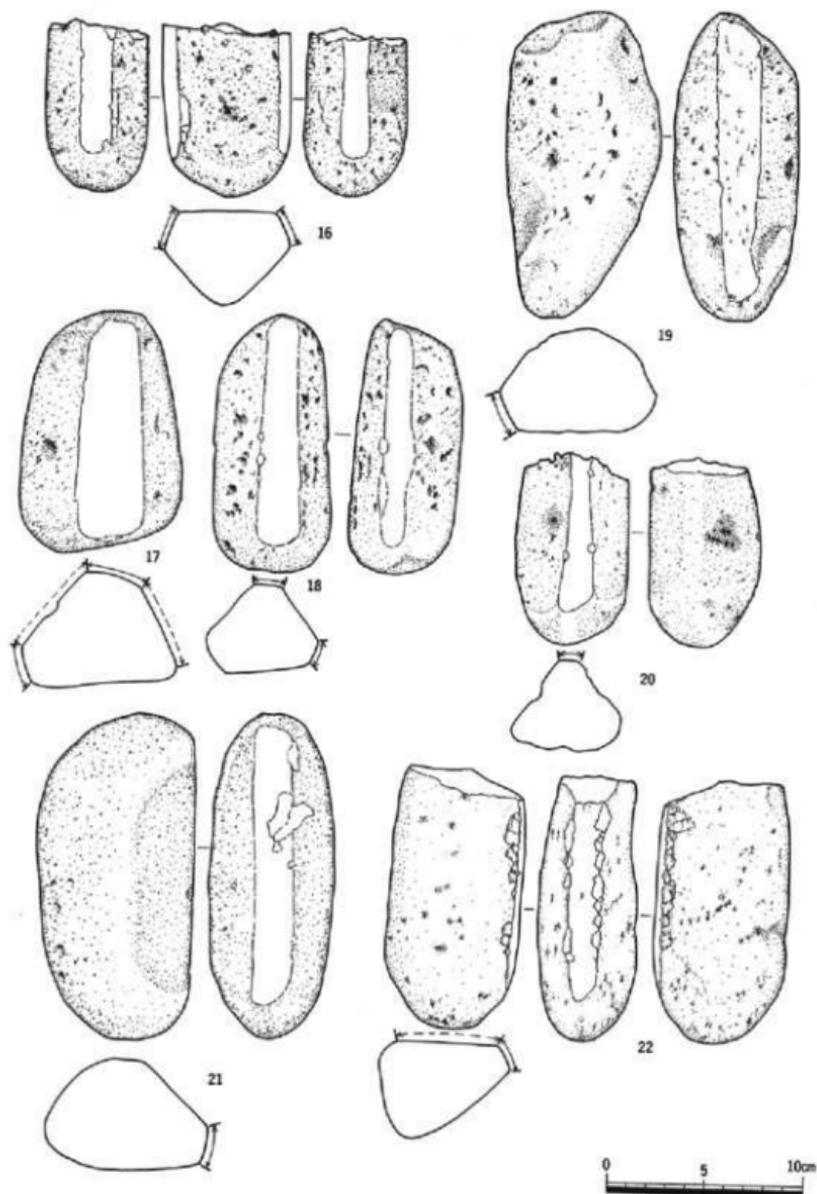
第20圖 凹石・磨製石斧実測図



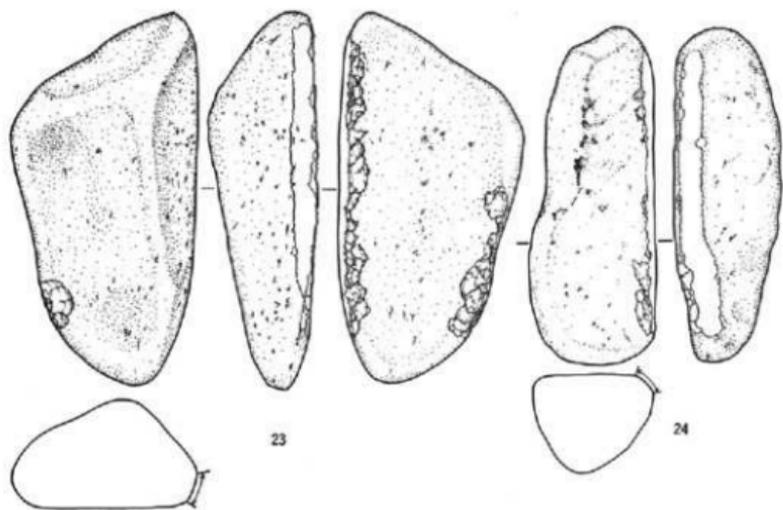
第21图 磨石实测图(1)



第22图 磨石实例图(2)

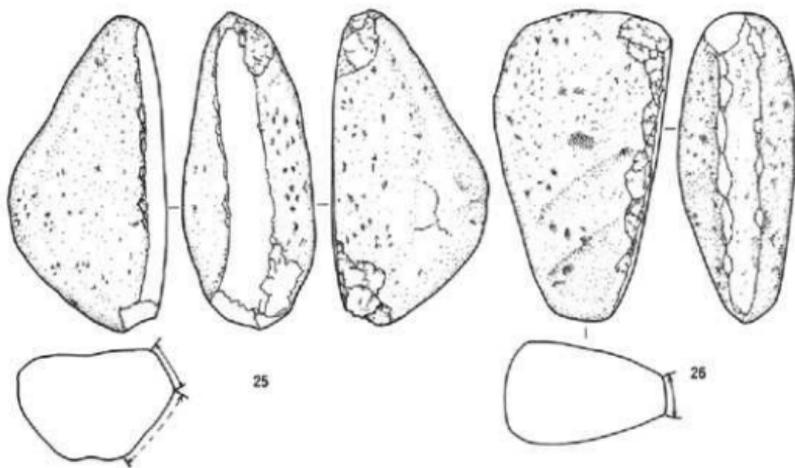


第23图 磨石实测图



23

24

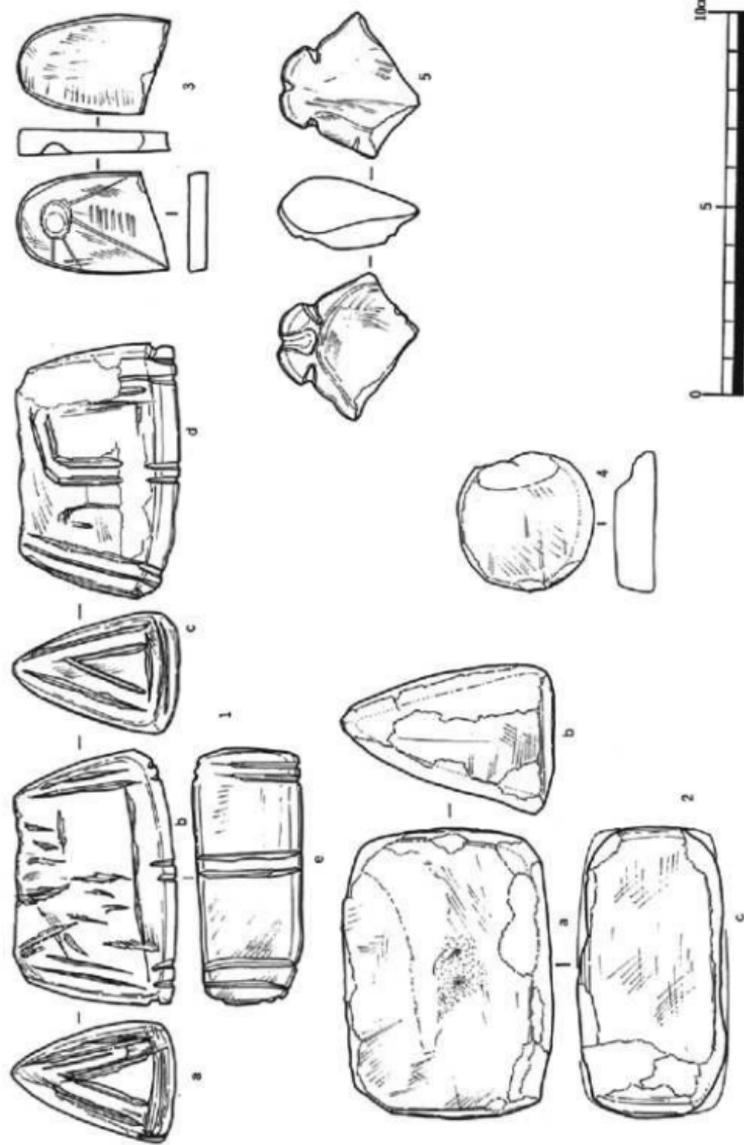


25

26



第24图 磨石夹测图(4)



第25图 石製品実測図

IV 総 括

I～III章まで述べてきたことをふまえて、本遺跡の問題点、課題を述べてまとめとしたい。

巾遺跡は、山形県尾花沢市大字細野字巾・カバ山に所在し、龍気川によって形成された河岸段丘上に立地する縄文時代中期の生活址である。

遺構は土壌4基、土壌埋設土器1基、埋甕6基である。その時期については、ほぼ次のようになると考えられる。

- 3号土壌—中期中葉
- 4号土壌—中期中葉
- 10号土壌—中期中葉
- 11号土壌—中期中葉
- 8号土壌埋設土器—大木8a式
- 1号埋甕跡—大木8a式
- 2号埋甕跡—大木8a式
- 3号埋甕跡—大木8a式
- 4号埋甕跡(?)—中期中葉
- 5号埋甕跡(?)—中期中葉
- 6号埋甕跡—大木8a式

遺物については、中期中葉から後葉にかけての土器群がみられ、中葉のものももっとも多く、僅かではあるが前期の土器群もみられる。石器などもほとんどが中期のものと考えられる。

今回の調査は晩秋ともあって、整理の期間が短かく十分な報告ができなかったのが心残りである。今後とも整理にあたって行きたい。

最後に、晩秋の冷たい風雨、小雪などにもかかわらず、地元の方々をはじめ、多くの方々から御協力を得、発掘調査を無事終了することができた。また、昭和58年1月2日・3日には、細野地区集落センターにおいて、巾遺跡出土遺物の展示会を行ない、盛況のうちに終えることができた。発掘調査・整理・展示会等で御協力いただいた方をここに明記して感謝の意を表します。

五十嵐他外蔵、五十嵐清悦、五十嵐一子、五十嵐大朔、五十嵐實蔵、五十嵐伸左工門、五十嵐忠一、五十嵐範雄、五十嵐力蔵、五十嵐キョツ、五十嵐忠太郎、五十嵐英太郎、

五十嵐ウメノ、五十嵐タマエ、五十嵐テイ、五十嵐タケ、菅藤貞次郎、元木サカエ、鈴木キツエ、元木マサヨ、五十嵐セツ子、井上文俊、田中タケ、落合新之助、佐藤良彦、熊谷松四郎、本間フヨ、大類キサエ、西塚フミ子、水上徳太郎、水上モヨ、鈴木久根吉、尾崎タツノ、豊島じろう、斎藤弘、柳橋十一、柳橋一子、元木スエノ、元木恵美子、元木ナツ、水上得雄、斎藤久一、大類弘子、佐藤比呂志、常盤小学校、常盤中学校

参考文献

- 1975年 東根市教育委員会・小林遺跡調査団 【小林遺跡】
山形県教育委員会 【岡山遺跡】
- 1976年 町田市田中谷戸遺跡調査会 【田中谷戸遺跡】
- 1977年 宮城県宮城郡七ヶ浜町教育委員会 【大木囲貝塚】
- 1978年 南方町教育委員会 【長者原貝塚】
- 1979年 山形県教育委員会 【熊ノ前遺跡】発掘調査報告書
八竜町教育委員会 【萱刈沢貝塚】
- 1981年 木下忠著 【埋甕—古代の出産習俗】 雄山閣考古学選書18
丹羽茂 【大木式土器】 「縄文文化の研究」4 縄文土器Ⅱ 雄山閣
山形県教育委員会 【大淵台遺跡】
山形県教育委員会 【下楨遺跡】
山形県教育委員会 【下野遺跡】
山形県教育委員会 【思い川A遺跡】
鈴木道之助著 図録『石器の基礎知識Ⅲ』 柏書房
- 1967年 興野義一 「大木式土器理解のために (I)」 【考古学ジャーナル】
- 1968年 興野義一 「大木式土器理解のために (II)」 【考古学ジャーナル】 No16
興野義一 「大木式土器理解のために (III)」 【考古学ジャーナル】 No18
興野義一 「大木式土器理解のために (IV)」 【考古学ジャーナル】 No24
- 1969年 興野義一 「大木式土器理解のために (V)」 【考古学ジャーナル】 No32
- 1970年 興野義一 「大木式土器理解のために (VI)」 【考古学ジャーナル】 No48

圖 版



遺跡遠景



遺構検出状況



発掘風景



土器出土状況



土器出土状況



1号埋甕跡



2号埋藏跡



3号埋藏跡



8号土壇埋設土器



土器出土状况



3号土坑



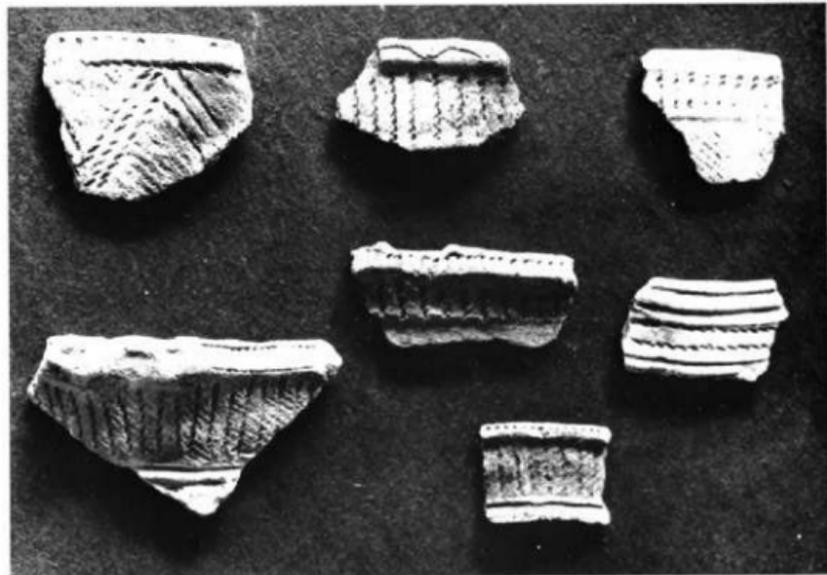




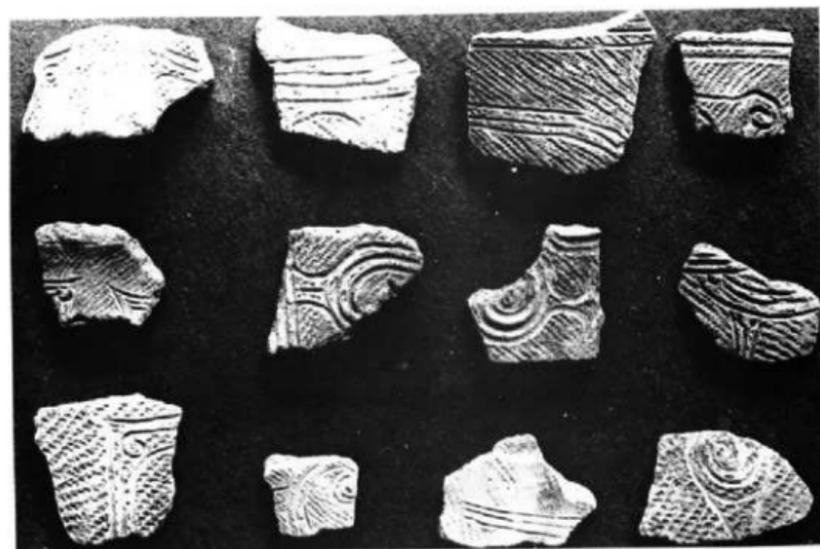


巾連跡出土土器(1)



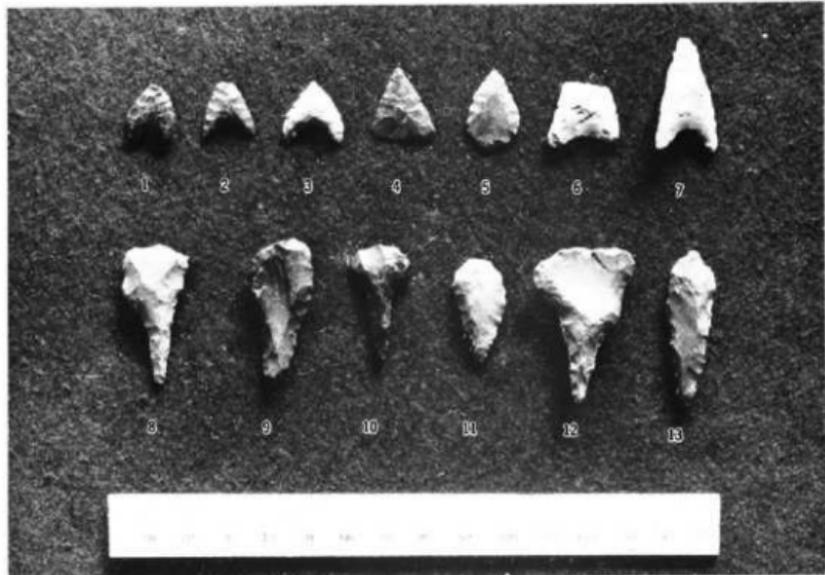


巾遺跡出土土器(3)

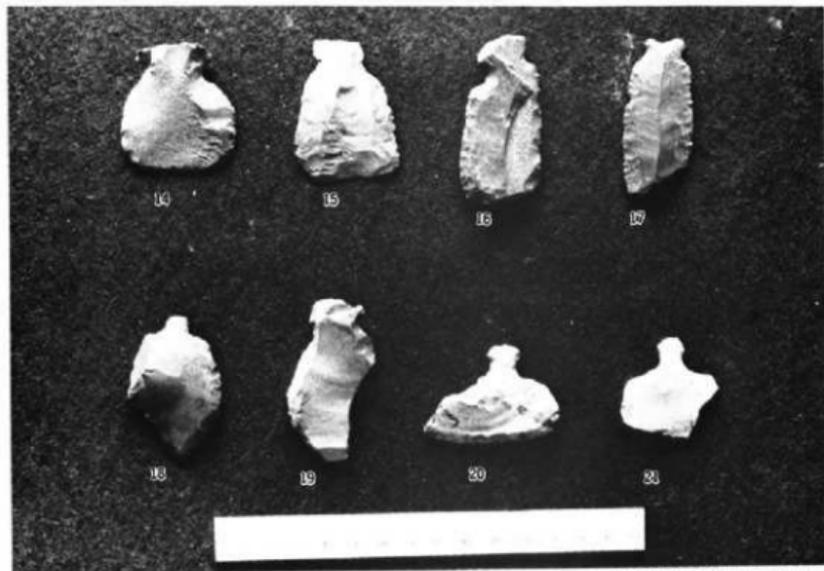


巾遺跡出土土器(4)





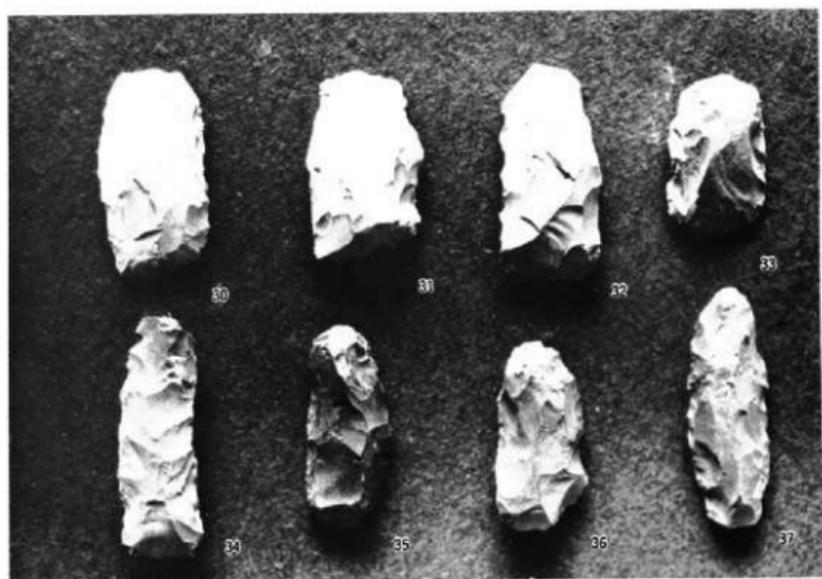
巾遺跡出土石器(1)石鏃・石鏃



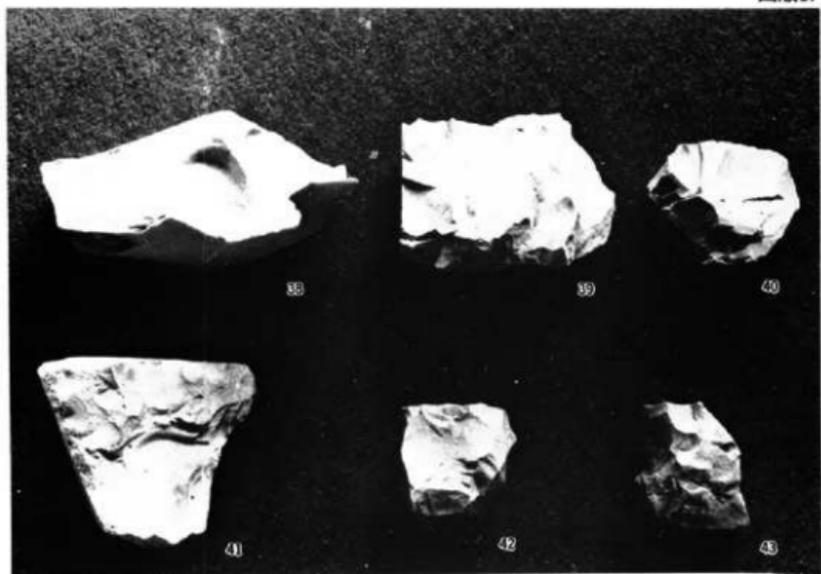
巾遺跡出土石器(1)石小刀



巾遺跡出土石器(2)攝器



巾遺跡出土石器(2)筥狀石器



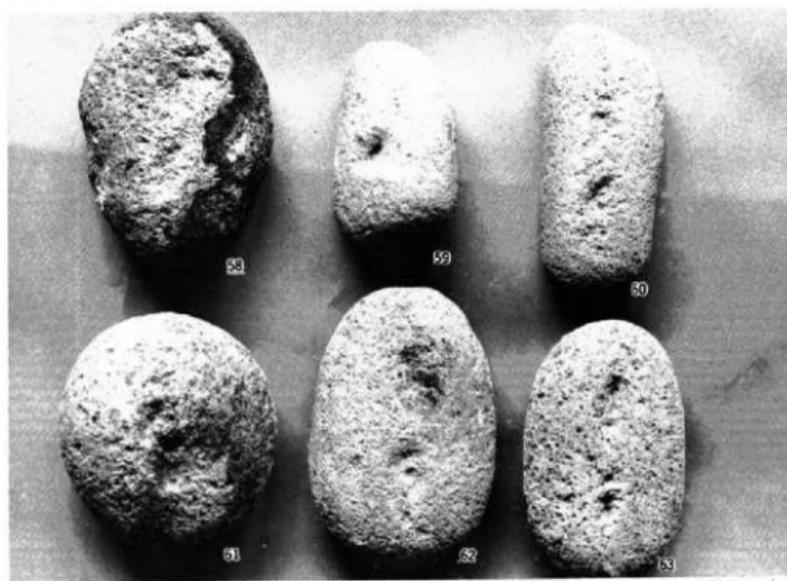
石核



巾遺跡出土石器(3)磨製石斧



磨石



市遺跡出土石器(4)凹石



64



65



66



67



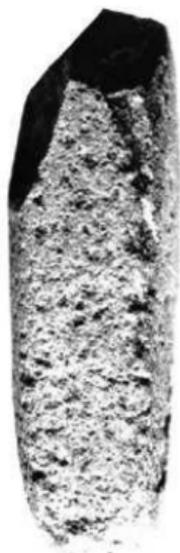
68



69



71



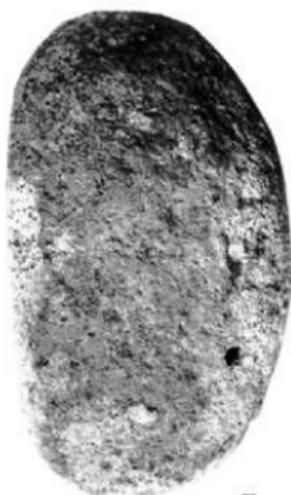
70



72



73



74



75



76



77



78



79



80



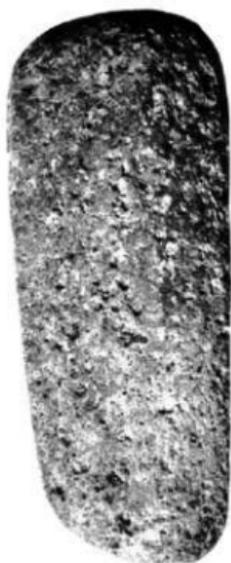
81



82



83



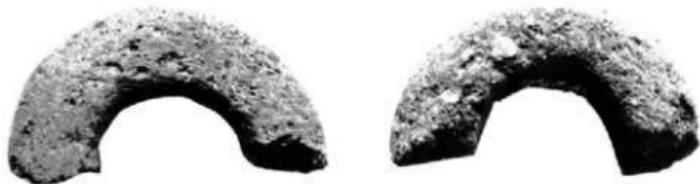
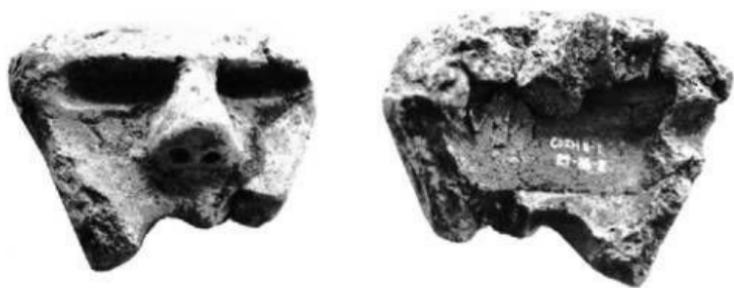
84



85



巾遺跡出土石器00石冠



巾遺跡出土遺物(11) 石製品 土偶・環状土製品

山形県尾花沢市埋蔵文化財調査報告書第2集

巾 遺 跡

発掘調査報告書

昭和58年3月発行

編集・発行 尾花沢市教育委員会
尾花沢市大字尾花沢2861
電話 02372-2-1111

印刷 株式会社 大風印刷
山形市あこや町一丁目4の3
電話 0236-31-5575

宿 駅 ・ 交 通 関 係 資 料 集

正 誤 表

（大変ご迷惑ですが、正誤表によって
訂正した上でご利用下さい）

宿駅・交通関係資料集 正誤表

頁段行	誤	正
頁段行	山刀伐	山刀伐
6	山刀伐	山刀伐
目次(五) 8	上。柳渡戸	下。柳渡戸
四上 14	大日本史編纂のため	編纂のとき
2上 16	曹良「奥の細道随行日記」	「曹良随行日記」
3上 10	一 二 三	(「おくのはそ道」 角川文庫) (押入) 勤兵衛 (富山、柴崎与左衛門 氏所蔵) (押入) 宝徳院 吸物さし出 申附……其後 早速役方 一、阿以嶋古薬物宅敷 旅人鉢之須、風呂敷 衛
9下 6	宝行院	宝徳院
14上 8	吸物さし出	吸物さし出
14上 12	申附……其後	申附……其後
14上 13	早速役方	早速役方
14下 16	一、阿以嶋古薬物宅敷	一、阿以嶋古薬物 宅敷
15下 2	旅人鉢之須、風呂敷	旅人鉢之須、風呂敷
16上 18	久兵衛・与五兵衛	衛
16下 11	兵左三門	兵左三門
16下 15	史料番号一五	2行右へ移行
19上 14	利門左衛	利左衛門
20上 8	史料番号一六	7行右へ移行
21上 12	住寺二男	住寺二男
21下 4	(以上……所蔵)	(以上……所蔵)

頁段行	誤	正
頁段行	多少かきらす	多少かきらす
22上 15	々減別ニ相成差引	減別ニ相成差引
22上 12	申兩年当高内別寄之通	申兩年当高内別寄之通
22下 1	六月九七日	六月廿七日
22下 14	六月九七日	六月廿七日
23上 14	(大澤寺……所蔵)	(八〇〇尾花沢……所蔵)
23下 4	瓜田重藏	瓜田重藏(九郎兵衛)
23下 10	御奉定	御奉定
23下 13	通款付付	通款付付
23下 14	向巳年迄	向巳年迄
23下 15	廿日限御相添	廿日限御相添
23下 16	後日念	後日念
23下 17	孫左衛門	孫左衛門
23下 18	御書籠り	御書籠り(二書籠)
24上 1	被差候之儀	被差候之儀
24下 7	候処、御承知	候処、以差ニ合御承知
25上 8	少し茂能相成	少し茂能相成
25上 10	茂能之間	茂能之間
28下 11	御通行御座候共	御通行御座候得共
28下 13	九ツ頃頃迄	九ツ頃迄
30上 4	(以上……所蔵)	(以上……所蔵)
31下 5	差留之儀左之通	なわ主として長井政太郎氏筆写本による(押入) 差留之儀申来左之通